

541
64



始



農學博士
石坂橘樹著

農村厚生問題

大正
14.6.4
內交

東京

二松堂藏版

541-64

序

本書は農村厚生(ルーラル、ウエルフェア)に関する著者の所見を述べたものでありますが、かねて農村啓蒙、農村青年、農村女子、農村文化、農村體育、農村政策、農村事情、農人心理、農村評論、食糧政策、組合政策、肥料政策、農村教育などに涉つていろくとのべておます。もとより系統的ではなく、また一齊に書いたものでもありません。農村厚生、農村啓蒙、農人心理などの文字は比較的新しいのであります。或は用語の

意義を解せぬ方もありませう、兎に角農村厚生が成
 立つて始めて、そこに農村振興が眞に、成立つもので
 あることが、本書に依て少しでも明かになることを
 得ますならば、著者の幸とするところであります。

大正十四年五月

著 者

目 次

一、農村厚生問題……………一

二、農業と日本の國民性……………九二

三、農村青年に與ふ……………一二三

四、農村啓蒙運動……………一二九

五、國家竝に自治體農業論……………一三三

六、産業組合振興機關設置の必要……………一七三

七、小作問題の解決方針……………一七五

八、地租委讓を斷行すべし……………二〇一

九、農村振興と農村經濟……………二〇九

十、農政隨筆……………二二三

一、農村文化と都市文化の問題……………二二三

二、帝國議會に於ける農村關係法案……………二三八

三、町村農會議員の選舉、附女子議員……………二三一

四、農事相談所と女子農業學校……………二三四

五、農民美術と農村文學……………二三八

六、帝國農政協會と農育補助金……………二三九

七、農民運動を旋回せんとす……………二四一

八、地主の家を包圍す……………二四三

九、大阪のお臺所を北海道の蔬菜で占領する……………二四四

十、土地の耕鋤を忘れてる……………二四七

十一、教育は可能で澤山だ……………二四九

十二、農村婦人のために……………二五一

十三、彼我の農民黨……………二五三

十四、チャールズ、チャップリンとメリイ、ピックフォード……………二五五

十五、大豆粕を非常に安く買入るゝ法……………二五六

十六、紳士の學問……………二六七

十七、農村と農民……………二六五

十八、農村の危機……………二六六

十九、農村問題の本義……………二六七

二十、農民離村……………二六九

二十一、農村の振興……………二七〇

二十二、日本流の經濟思想……………二七一

二十三、一時期の表徴……………二七三

二十四、養蠶興國……………二七四

二十五、農業國と商業國……………二七五

二十六、農民倫理……………二七七

二十七、商人倫理……………二七八

十一、農村體育……………二八一

一、農村體育熱に就て……………二八一

二、アメリカの各種體育技の發達……………二八五

十二、拈華微笑——評論……………三〇一

一、農村小説の問題……………三〇一

二、ピラテリンの命名……………三〇一

三、所謂地震部屋の構造……………三〇二

四、驚くべき性慾上の事實……………三〇三

五、若い令嬢の洋行土産……………三〇五

六、これにて農民生活の安定とは……………三〇五

七、年に八千名の告訴……………三〇六

八、日本ではたつたお二人……………三〇七

九、アデクス法とゴ老人……………三〇七

十、學者が理想を追はぬ……………三〇八

十一、生絲輸出—港主義の疑義……………三〇九

十二、農會のセトルメント……………三一一

十三、小作爭議の變調……………三一二

十四、小作代表の縣會議員……………三二二

十五、農民黨の誕生……………三二三

十六、農林共通の農學部……………三二四

十七、工場の地方分散……………三二五

十八、朝鮮小作農の内地出稼……………三二六

十九、小麥の關稅政策……………三二八

二十、破瓜期何事によらず實行に着手すべき時……………三三二

二十一、女は風を上げ男はセーターを編む……………三三四

二十二、人に見せられない大切なもの……………三三五

二十三、得意の農業政策に油が乗つて……………三三六

二十四、動くのは善惡とも進歩だ……………三三七

二十五、國會議員は成長した大學生……………三三八

二十六、アリストクラシーとオリガーキー(講義)……………三三九

二十七、都市農村罵倒し合ふ……………三三九

二十八、猿股と六尺孰れかの問題……………三三〇

二十九、先づ行李よりトランクたれ……………三三〇

三十、自分の好いた人とどうなる……………三三一

三十一、林間酒を温む……………三三二

三十二、市に隠るゝもの……………三三三

三十三、お手近な亭主さんへ……………三三四

三十四、女の力も偉い……………三三七

三十五、農業經營の新轉換……………三三八

三十六、人間の一番意義ある生活……………三三九

三十七、それが人情なんでせう……………三四〇

三十八、妙齡女子の擡力……………三四二

三十九、文明を咀ふのは早過ぎる……………三四三

四十、たつた三人の女……………三四四

十三、組合運動の眞義及注意……………三四七

十四、時代の推移と蠶絲業者……………三六一

十五、養蠶業者と愛……………三七五

十六、經濟的强者たれ……………三八三

十七、農業と女子……………三六九

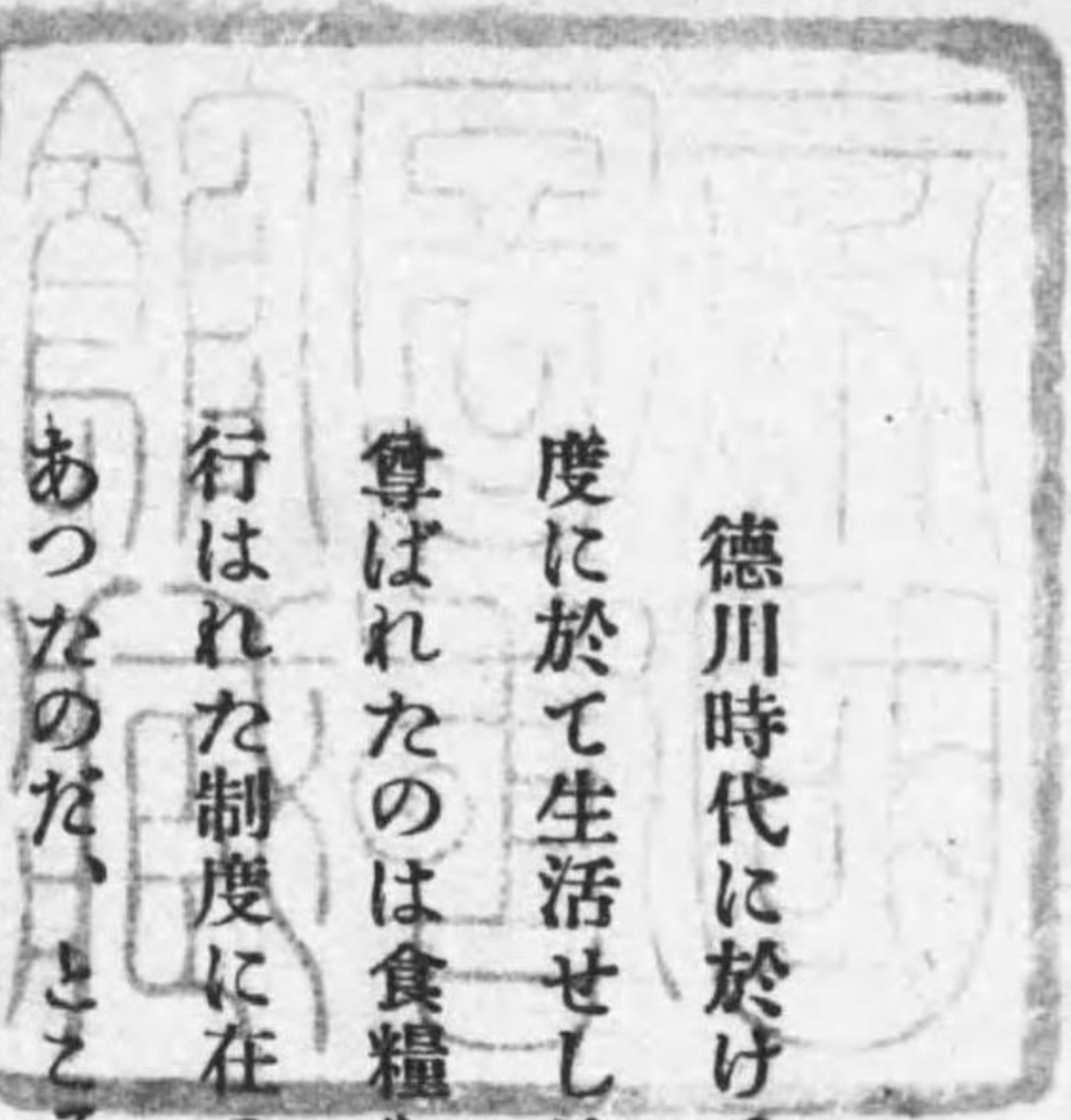
十八、農學の話……………四二一

目次終

一、農村厚生問題

農村厚生問題

はしがき



徳川時代に於ける農民は洵に憐れなものであつた、彼等は生きるか死ぬるかの程度に於て生活せしめられた、彼等は士農工商といつて、士の次に置かれたが、その尊ばれたのは食糧を生産するからで殆ど納税機械であつた、封建時代の鎖國主義の行はれた制度に在つては、國を守るにも建てるにも、一番先きに必要なるは食物であつたのだ、ところが一方には食物を消費して何もせず遊んでゐたのは士分であつた、固より商工業もあつたが其生産の云ふに足らぬ程度のものだとすれば、勢ひ何もかも、農民が負擔せねばならなかつた、そこで農民は食物を生産したばかりでなく、従つて租税をも大部分負擔させられたのであつた、斯かる重寶な機械は何

が何でも尊ばねばならぬ、然るに此機械の油は何であつたかといふと時に豆腐を喰べる位に過ぎなかつた、それであつて自分の階級ばかりでなく他の階級をも負ふて立つたといふのは、何たるエラサであらう。

明治時代になつてから徳川時代の窮屈なる束縛はとり除かれた、徳川時代にあつて、何故に政府は農民を束縛したかといふは農は生産の民であるけれども商は消費の民である、消費の民の多くなるのは一國の富の衰へる所以であるばかりでなく、國民を奢侈に導くものである、奢侈は國を亡ぼすから出来るだけ農民を其儘にした^いからである然しながら誰も遊は仕たい出来るなら遊んで食べたい、頭を遣つても儲け仕事を仕度い、此仕度いのを其儘にすれば農は減つて商に爲るのである、だから農民を束縛して農村を去らしめぬ事にした、どういふ風にして、さらしめぬ事にしたかといふと、一定面積例へば一町村の土地にはどれ丈の食糧生産があつて、その生産量はどれ丈の人を保つことが出来るかといふことを調べて、最高度まで農民

を其一定面積内に於て働かしたのであつた、人口が増加して、どうしても、其處だけの食物では食ふに足らぬやうになつて、始めて他に移ることを許した、或は他村にゆき或は商工になつて都會にゆくのを許した、併しそれも餘程抑へされぬやうにならねば之と認むることをしなかつた。

二

昔は農民は江戸(今の東京)にゆくには其組合に届出をなし何日頃になつたら歸村する事を約束するのであつた恰も今日學校の寄宿舎にゐる中學生が休日に父兄の許に歸る時のやうな規定の下に立つたのであつた。之れが獨立した―實は其意義で眞に獨立はせぬけれど―一個の農民であつたのだ、今より之を考ふれば實に不甲斐なき窮農のミジメな有様であつたといはねばならぬ、併し之は今の自由な境遇より之を觀るからそう思ふので、一般の農民は之を苦とせず却て樂としたのであつた、何故樂かといふと食ひはぐれはなかつた、五人組といふ組合があつて組頭は萬事一切

組合の牛耳をとり又之を監督するのであつた、政府に對する納租義務は此組頭が責任の衝に立つたので、若し組合員にして怠けるものがあれば之を怠けぬやうにした、そうでないと租税は自ら之を出さねばならぬ、さういふ風な譯合で誰もかも遊ぶものはなかつた、遊べなかつた。組合員の中に病人があり或は女や小兒ばかりで野良仕事も手廻りかぬる場合は、他の組合員は代はりて農業を仕て遣つた、これはお互ごつこであつた、つまり誰も彼も生活の保障は五人組が仕て呉れたのだ、それでも中に心あるもの又は心なきものでも組合より逃れて走るものはあつた、走るものがあれば組頭は忽ち重き仕置を受けたのであつたから出来る限り之を抑制したのは亦當然であつた、農民中名主は銘仙ぐらゐは被ることを許されたが、農民（百姓と水呑とあり、百姓は土地持ち、土地を持たぬのが水呑）は木綿以外の衣物を着ることは出来なかつた、頭髮も一定のさまりがあつた、だから、そして何處までも習慣は抜けぬものであるから、その素性は大抵見顯はされます、そしてみつけられます江戸など

は町々には木戸があり、見附といものがあつて門を締めましたが、その外に木戸があつた、東京新宿の大木戸などは其名残りだ、狼藉者即ち籍を逃れて來たものがあれば或は盜賊でもあれば、直ぐ町木戸を締めますから袋の中の鼠であります、今の東京の警察のやうに六人殺しがあつて其犯人が捕らぬため署長が辭職をするといふやうなことは先づ無い仕掛けてあつたのだ。

三

斯様な束縛を農民は一般に受けて居つた、其の代はり生活の保障はお上からあつた、農民の安堵せぬ領主は罰せられた、お咎めを受くるのが常であつた、だから農民は國寶であつた、その國寶の意義は前述べたやうな随分有難迷惑なものであつたが、當時一般の農民はさういふものと觀念して居つたから、別に怪しみもせず苦にもせないであつたらう、さういふ國寶たることを讀者諸君は望めますか、どうか、食ふことに事を缺かぬ、其の代はり米は變り日でなくては喰ひぬ、普通は麥を

食べることになつて居り、豆腐は米を作る面積をつぶすから何故かといふと豆をつくるから禁止してあつた、贅澤品に見做されて何故か物目でなくば豆腐を食ふことを禁じた次第である、煙草は勿論そうであつた、併しこれは面白いのであつて、或る藩では、煙草のよく出きる所謂特産地の國主は、之を奨励したのであつた、どうも一方には之を奢侈品として用ふることを禁じ一方では之れが耕作を奨励するとは辻褃の合はぬ咄してあるが、實はお上ではチャント辻褃が合つて居つた、徳川政府は當該藩主に煙草製造の特許權を賦與してあるので、其代はり租税は可成取上げたのであらう、若し煙草の産地に之れが耕作を禁じればそれ丈生産は減り、生産が減ればそれ丈租税の納め方も減る筈である、農民の利害からきてゐるのではない、お上の立場から斯かる辻褃の合はぬが合つてゐることをしたのだ。

四

徳川時代三百年の間斯かる社會上制度上耕作上束縛を受けた農民も明治維新以來

大概或は早く或は晩く其束縛を解放された作物の耕作禁止は解かれた、食物、衣服、住居、どんなものを用ふるも、どういふ家に住ふも自由となつた、昔しは衡門にあらざれば武士で無つたのだ、農民の中で名主丈は門をつけることも許された又玄關をも許されたが其間取及其數は一定して其規定を破ることは出来なかつた、馬にのることは出来なかつた、それが明治維新になつて皆キレイに許された、頭も散髪になることを許された、所が慣習といふものは奇妙なものであつて、誰れも散髪になるものがなかつた、散髪になるのはイヤな譯ではなかつたが、何となく坊主頭となるのが惜しかつたとのことだ、併し一人奮發して散髪したら其清々したこと、手数の入らぬこと、思ひの外立派であつたので、皆々之に倣ふといふ次第であつたとのこと聞きしました、傳統といふのは恐ろしいもので、之を打破するには餘程の勇氣を要するものだといふことが此散髪の一事でも分ります、凡て物事は之を成遂げた後では昔し咄しとなつて笑つたり、ツマ、ラ、ないなど申しますが、當時は實はそれが

大それた事であつて既に傳統を破つたといふ唯それ丈のことで、首臺が飛んだことは徳川時代に數あつたことで、其れほど舊式乃至格式を尊んだのであつた、而して公安を維持したのであつた、何事にも新らしいことは其はよいことであれ、悪しきことであれ、先づ頭から之を忌み嫌つたのであつた、これは餘り考のないことのやうに今からは思はれるけれども、實に格式舊式を維持することにのみ没頭し目がくらみて他を顧みる邊がなかつたのだ、餘り智慧の無さ過ぐるやうに思はれますが、實はそれが家康の最もエラキところであつて、三百年の天下を維持した所以であります。

ところが時勢には勝てない、三ツ子も三年経てば六ツとなる、獨立します、斯の如く農民を抑へ付けて其生活上經濟上並に社會上の發展を無理無體に抑へ付けて一厘ものびることなからしめんとした努力も其甲斐がなくなつたのだ、それが前に述べた明治維新であります、今迄箱入であつた重寶がられた溫和しい農民も今や散髪となり洋服を着用し乗馬にのり帽子を被ぶり、牛鍋をツ、ツ、牛乳を飲むに至つた、

其生活上社會上の變革は大したものて到底今の人の想像する能はざる所と申さねばなりません、農業耕作乃至組織上に至ても或者は豚を飼ひ蠶を養ひ葡萄を作り梨子を植へ其他何なりと思ふところのことを自由にすることが出来た、之れがため産物を失ふものもあれば、つくるものもあつた、ダンブクロ(スポンのこと)穿いて馬に乗れば、タメを擔ぎ車をも挽いた、籠より出た鳥は自由に天下を飛翔するのであつた、久米の仙人ならぬ足を踏みはづすものは随分あつたといふのも無理ならぬ咄しであります。

五

今までは土地は先祖代々之を耕作して之を占有し使用収益するものであつたが之を表向き賣ることも質入れることも出来なかつた、今日のことばで之を申すと、土地の處分は禁ぜられてあつた、これが明治維新になつて解禁、土地賣買自由となつた、所有權も認められた、今迄内々土地を擔保になし質入したものは(之は内々、

裏面してゐたのだ) 忽ち公然其土地より離れざるを得なかつた、カ、ラ、ケ、ツになつてしまつた、百姓が水呑になつたのである、水呑なれば到る處の農村にない事はないから結局氣樂な身代となつたわけだが、マ、サ、カ、さうもなれないだらうが、併し實際土地に離れ自由となつて水呑となつたものは澤山あるべき筈だ之に就て申したいのは今日大地主として村中一人でもつて居るやうな地所持それほどでなくとも兎に角地所持ちとなれるものに、斯かる次第で徳川時代の土地處分禁止のお蔭で所謂子前のものゝ地所を唯預かつて居つたのが、いつのまにか自分のものとなつてしまつたのもありませう、唯預つたのではない多少お金を貸したもので、一とうに其れだけのは利に利を入れてなしくづしになつたものが其儘に流れ込んでるのもありませう、一代が二代になり三代になる中には書類も失せて何の證據もなければ、それは預け主のものではないことになる、斯かる土地所有權の推移ばかりではありません、明治維新後政府は土地所有權を定めて地租納稅者を確むるため從來の土地占有

者をして之を所有せしめんとしたところ所有者となる曉は地租を納めねばならぬので、眞の所有者でも其申出をなさず、之れがため國有地などになつた地所もあつたのであります、税を納めるのがいやで自分の土地を知らぬ顔の半兵衛で其儘流して仕舞つたのであります、世の移り易りの時代には色々今日では想像のつかぬこともありますが、併しそれは其のときの事情に就て尋ねると、その理由は讀めないことではないのであります。

六

徳川時代に於ける農民は憐れなものであつた、併し食へぬことはなかつた、それで満足でなかつたにしろ、兎に角天下泰平三百年間暮らしたのであります、明治維新となつて從來の窮屈な所謂憐れな状態は、表面のところはなくなつてしまつた、といつてよい、先づ何もかも自由となり開放となつた、天賦人權、自由平等、社會契約などの理想論は中井兆民のルツソー反譯より自由民權家に行き涉つて河野廣

中、大井馬城、馬場辰猪、藤田茂吉、尾崎、犬養などこれは順序はどうであるか請合はない、殊に馬場辰猪の能辯と學者風は一世を風靡するのであつた、此尊ぶべき志士は遂にアメリカで病歿した、彼れは羽織袴で演説してあるいた、其風采と高潔な生活は随分彼の地の人をして憧憬せしめたといふことである、随分面白いエピソードもある筈であるが、これは聞き洩した、明治維新となり此等志士先生達の音頭取りて農村間に自由民権の思想は大にひろまつた、一體日本人で人ともいはるゝものは皆農村より出て居るのであつて、町人より出たのもあるが志士としては、大鹽平八郎位のものであらう、サスが時代は時代であつて、今は都市からも中々エラキ人が出て居る、彼の福田徳三博士の如きそれであらう、これは學者の例であるが、政治家乃至志士中にもあるであらう、自由民権の思潮は斯くして天下を風靡して、遂には明治二十三年を以て國會開設の詔勅が出た、それは政治上初めての開放である、政治開放の端緒である其結果として今日の日比谷の帝國議會が生れたのである、

而して是等志士達は農村出であつて農民であるから、日本の政治的開放は農民之をなさしめたといふ名譽を擔ふべきである。

七

さて政治上の開放が農民のお影でできた、然れば其できた開放の舞臺に上つたものは農民であつたかといへばそれはそうでなかつた、武士階級に屬するものであつた、私は寡聞未だ農民の臺閣に立つた例を知らぬ、今は別である、その當時のことをいふのである、農民自ら之を開拓し之を熟土とし、而して之れが收穫は鳶にさらはれた、甚だ間職に合はぬ話であつたが、仕方がない、農民には其力がなかつた、併し兎に角土地を切開きて新開地を作ることには骨は折れるが、中々愉快なものだ。労働した後、渴を醫すときの心地である、何とも譬ひやうのない氣持である、此心地氣持は併し度々やる中にはそれほどでもなくなる又珍らしくなくなるやうだが、それでもそうばかりではないとみえる、其證據には今日所謂政治家といふ名前

をとり代議士位になつたり、又なつて居る人は皆此快を貪ぼり其果ては貪り過ぎたせいか、それとも不甲斐ない自己の招いた處が、社會の罪か、それは分らぬが、大抵は先祖代々の土地から離れたのである、それでも御本人は其國政に盡したといふ札付きがあるから郷黨から崇められてゐるが、其家族は財産はなくなり従て社會的地位は高くなく、固より其人爵はないから憫れなものとならざるを得ない。

八

治者被治者の階級はなくなつたのは無論であるが、政治上の開放があつた後、法律上の開放も亦當然行はれた、農村に於ける水呑も百姓も地主も小作人も其地位に於ては法律上平等となつた、お本人は之を知らぬが、いつのまにか法律上の平等は出來て仕舞つた、それは政治上の開放とは違つて容易く行はれた、といふのは簿書の上で出來るからである、單に一片のお布令で事足るからである、法律は公布された上は之を知るも知らぬも、免がるゝことは出來ない、而かも普通の人は之れがた

め毫も生活上經濟上支障を見ない、苟も悪心のない限り窮屈を感じない、法律上平等な位置となつても地主も小作人も之を覺らぬ、縦し覺つても不自由乃至不便をも感ぜぬのであるから、法律のないのと同様である、イヤ、ないのではない、元も法律、自他不平等の掟と同じである、併しながら人事上争ひのないことはないものであつて、其人事上の争に携さはつたものは、法律の有難さを味ふことは出來た、其出來たのは小作の農民であつて、之れが其今更ながら驚いたのは親作の農民であらねばならなかつた、いつのまにか法律は小作も親作も同等に取扱ふ事となつて居つた、威張ることもどうすることも、法律の前には出來なかつた、法律は凡ての人を其前に同等に取扱ふのである。

九

併しながら政治上法律上自他平等の組立はできても、實際はほんとうにそう平等にならぬは已むを得ぬのであつて、社會の現實である、政治は動もすれば社會の上

流に居るものゝために役立さるゝ事が多かつた、之は運用者が人であるからであつて、其運用する人は知ばかりではない情もあるからである、まして慾も手傳ふからである、小前の爲めに骨折りて難有がらるることはあつても、一文にもならぬからである、法律には自他平等であつても、若も法律を楯にとつて争ふものなら、それこそ大變、小作地は謂はれなく取上げられ、其處で食ふことは出来なくなる、してみると政治上法律上の開放は、社會上の開放と伴はぬときは殆ど其效能をなくするものである、法律上は自他平等である、政治上にも同等であつても大地主と小地主、地主と小作、それ／＼階段があることになる、社會上の開放行はれねば駄目だといふことになる。

十

社會上の開放といふと人々の社會上に於ける位置を平等にするのである、併しなから平等にするといふ布令を出した處が、之は執行者が法官であれば争ひのあつた

とき法の命ずる通り平等に取判くから平等が實現するだらうが社會上人々の占めてゐる位置は、すぐ様取去らるゝものではない、これはいふ迄もないことだ、それ故に社會上の平等は經濟上の平等之に伴はねば駄目となる、形式上の平等はあつても實際上平等はないのである、之を實際上政治上にも法律上にも社會上にも自他平等ならしむるは經濟の交渉である、經濟茲に入り來つて地主と小作、雇主と被雇主との實際上平等となる可能初めて生ずるのである、餘り理窟めいてきたが、此理窟は行はれる可能があつて、そして中々容易に行はれないのは農村である、都會では此理論は容易に行はれるのである従つて政治上法律上社會上の平等はズン／＼行はれつゝある。

十一

なぜ、農村にはそれが行はれ難いかといふと、農村に於ける人々の經濟關係は未來永劫其從來の關係を破ぶることが出来ぬからである、それは農村にも大地主が政

治道樂のため乃至人におだてられて身代をつかひ盡くして小地主となり水呑となり東京に逃げてきてるものは澤山ある、今日政黨仲間で東京に来て居る者には、其事業乃至職業の關係上東京住居を利便とするから、そうしてゐるものもあるが、經濟上農村に居られぬからのものも中々多いであらう、又今では小地主が中々大地主となり高利貸などから村の大地主となつたのも中々少なからぬであらう、併しそれは都會に於ける有爲轉變のやうに一般的でなくて僅かに數ふる位に過ぎない、マサカ印度のケーストのやうではないとしても、先づ代々變はりがなくて過ぎ行くのである、だから農村では凡ての開放は唯其儘では行はれ難い、傳統はどこまでも傳統てゆく、従つて傳統を尊ぶことは農村に甚だしい、理窟は理窟としてどうしても農村に居つては頭があがらぬ、そんなばかな理窟はなくて而かも在るのだ、だから苟も有爲の人は農村を飛び出すのだ、他にも原因があつて必ずしもそれのみではない、併しそれは原因の大きな而かも有力なものであるやうだ。

十二

折角萬事開放でやつて来て、其開放が經濟上の開放の名ばかりで行き止まりとは甚だ惜しいこれは何とかせねばなるまい、經濟上の開放が行はれて從來の關係が打破されるれば、社會上法律上政治上の解放も實質上完全に行はるゝことになるのである、然ればどうして實現するか、といふ問題になる、それには例の直接行動をやる、それは餘りに早まり過ぐるのみならず、平和を口にするものゝなすべきところではない、苟くも暴力に訴へるといふことは、動物類ならイザ知らず、人間は之を避くべきである、避くれば目的を達せぬと限られてるのではないからである、ゆく／＼のことは別として、今日では經濟制度社會制度の中に在りて爲すべきことをしやうではないか、これなら法にも觸れず、法令の範圍内で十分手腕を振ふこともでき、法律といふと何でも束縛するやうに解さるるが法は束縛するのみではない、却て開放するのである、其意義に於て労働組合の如き小作組合の如きも歓迎してよい

のである、食はず嫌ひは困つたものだ、人々はお互に権利義務を闘はし盡くして初めて調和すべきものである、初めより沈黙し引込み思案で、ごむりご尤も、内心大に不平を蓄ふるはよくない、之は他日破裂の恐れがある、年が年中思ふ所は洩らすやう仕向くるに限る、そうすると不平はよし思ふ所を達せぬにしても消え失せるものである、徳川時代では御無理御尤で通つてきたのだが、これは農民は御無理御尤もを敢て不平とはしなかつた、といふのは御上が萬事世話をやつてやり、食ふことから衣ることから冠婚葬祭一切萬事、御世話が届いてゐたからである、今の世は萬事己れがするのである、そして其責任は自分に來る、誰れもかまつては呉れない、それでする事なすこと干渉されてはだまつて居られぬ譯だ、之は十分自由にやらせるに限る、だから昔しは不平はあつても大したことはない、それは無害のものであつた、今は不平は少しでもないやうにせねばならずそれには何も彼も大抵のことは大目にみてやらせるより外はない、そうして誰れでも政治上には携はることになし

經濟生活の安定を得せしむるやうすべきである。

十三

經濟生活の安定といふことは人生の根基である、これは人生のアルファ[△]とオメガ[△]である、普通の人は先づそうである、一簞の食一瓢の飲で満足する人もある、褊褊を被て輕裘の間に立つて優然たるものもあるのだ、併し之れは聖人君子にのみ望むべき事である、それも其時代と今の時とは丸で世代相も違へば、時代思潮も異なり、其作用も一樣ではない筈だ、それであるから農村の經濟生活の安定にはどうしても其根基たる一定地積を興ふることから始めねばならぬ、生活の根本たる一定地積にあらば、先づ不安定だけは免れるであらう、土地とは離るべからざる關係にあるものであつて、而かも其土地は他の任意の儘であるとすれば、よしそれによりて十分な物資を得るにしても不安定は免れぬ、まして他人の土地に衣食して尙足らぬやうでは到底生活の安定を得られぬことは明かであらう、農村經濟生活の根基たる一

定地積とはどの位の面積を指すのか、これは大體上きめられぬことはあるまい、とに角そこまでゆけば農村の厚生（ルーラル、ウイルフエア）が始まるのである。

十四

併しながら農村經濟生活の根基たる一定地積を農業労働者は皆與へらるゝことゝなつたからとて、そのみで農村の厚生はすつかり出來あがる、これはトテツもない、そんなことで農村の厚生は成立たぬ、それはホンの初歩であるのだ、謂はじやツと膳立がすんで飯と汁があるのみ位に當る、今時そんなもので誰れが食ふものか、マサカ水呑みでもあるメイシと都會の人でないともタンカを切るであらう、それは當然であつて、農村民であるから米飯があればそれで澤山だ、魚類はいらぬ牛肉は贅澤である、などと思ふのは思ふものゝ事理を辨へぬ骨頂である、遊んで居る人程まづいもので足りるのであつて、働らく人ほど旨いものを食ふべき筈であるのだ、老人は體力を維持する丈けの食物で十分である、小供は體格を造作するに必要

なる食物をとらねばならぬ、維持食と榮養食とは根本に於て違はねばならぬ、それを顛倒して小供は美食は入らぬと思ふのは間違ひの骨頂である、労働する人程美食をとるべきである、美食とは贅食を意義せぬ、贅物は禁物とすべし、なくてはならぬものを攝らぬのが我が農民である、此點からして掛らねばならぬ、單に食物ばかりではない、住居もじみ／＼した暗らい太陽のさゝぬ、雨露を凌ぐばかりの處でどうして労働力が本統に維持されやうか、これが出來ると思ふのは、豚は穢ない處でよいとするのと同じで、豚を本統に知るものではない、従つて豚は十分の生産をせぬのである、農民は性來頑丈であるから、それでも労働を續けることは續けるが、それでは能率は當然あがらぬ、一毛二毛作に過ぎぬのが一朝不可抗力のため其勞力の成果物を洗ひ去られ、嘗め盡され若は其地盤を持ち去られれほどでなく共從來勞力の結果たる地産力を持ち去られるとは、何たる不幸のことであらう、これは決して不可抗力のため奪はるゝことがない様にせねばならぬ、これは土木工事で出來や

う、併し完全な治水排水工事が出来ても天然力に打勝つことは人力の到底よくせぬことと思はねばならぬ、だから萬一の事柄にも平素用意が肝腎である、農地を保険するのみならず農産物をも保険に付せねばならぬ、それから衣食住に次で病氣のことがある、農村には色々の疾病がある、之を撲滅することは尤も肝腎である。

十五

以上のべたことは極めて其大きな農村厚生の基本ともいふべきものに過ぎぬ、其他農村厚生を築きあぐるに於ては叶はぬ幾多の施設設備を要するのである、それはあと／＼順々に本論に入りて述べることにしませう。

本論

一

前のはしがきに於て日本の農村がどうして今日の様になり來つたのか主として社會上經濟上の原因にかねて政治上法制上のことを述べた積りであります、今日の我が農村は地所持の農業者のみでもとより成立てゐないので、其實地所をも待たぬ所謂水呑が多いのであつて、地所持4ノ曲言も亦有百姓はどこの村々に行つても甚だ少ない有様である、それは、農商務統計などに待たずとも分ることであり、そこで何でも地所持にすることは先づ農村の生活を安定せしむる第一の基本である。ところが此の凡ての農業者をして相當の地所持にすることが其實中々容易のことではない、よし地所持にしたところが農業經營上人は失敗もすれば成功もする、今日の地所持必ずしも明日の地所持とは限らぬ、これは經濟上社會上已むを得ぬ自然の成行である、その

みてない農村といふても、農業者のみではない、非農業者も農村に住んで居るのであつて其孰れを缺いても農村の生活の安定乃至厚生を全ふすることは出来ないのてあります、農産物を買ふものは之を安く買はんとする、農産物を賣るものは之を高く賣りたいのであります、斯かる經濟上利害相反する人達が農村にも居住するのであります、これはいふまでもない、固より人は經濟上の利害のみに執着するものではない、如何に需要品を安く買はんとしても生産物を高く賣らんとしてもそれ相當の勘定合といふところが、人々の懷合によりて違ひはするが、あるのでありますから、どこかに思ふところがあるべきであります、併しながらこれは個人相互の間柄のことであることに注意すべきであつて、小作爭議なども親作小作の間柄であり、近處合壁のものであれば、そう／＼角目立ちて争ふつもりもない、縦しありまして、大抵は争はずして濟むものであります、それが個人同志の間柄を去りて地主は地主、小作は小作と相方雙び立つといふ形式となると、知合同志で融和協合するや

うには仕度くてもなりかぬるのでありますして其極は忌むべき爭議となります、これは今日の社會に於ては免かれぬ現象であります、階級闘争の起る所以であります、夫婦相和しますが、男女社會的に相争ひつゝあるは西洋の社會現象でありまして早晩我邦にも亦現はれませう、現に其端緒は見えて居るではありませんか、ですから農村の安寧厚生を完ふするには、從來の如く獨り農業者のみの利害安寧を圖るてはいきませぬ、農村居住者全體としてのことを爲さねばなりません、農村居住者全體の安寧厚生を圖ると申すのは、先づ居住地として又耕農地として土地の安全から始めねばならぬ居住地農耕地は固より土地は凡て其自然的乃至人工的の危害より絶対に安全を保障されねばなりません、此點に於ける我邦の土地の安全は殆ど零てあります、それは天然的に不可抗力からも人爲からも安全な所もないではない、併しそれは一般ではないのであります、我邦は地震國でありますからいつどんな強震が起つて地盤を振盪し人命を奪取せぬとは限りませんが、併し今日の地質學乃至地

震學の程度にても、例へば強震は起つても之に對する豫防をなすことだけは出來ませう、耐震家屋を構造するだけ（方針）でもよろしい、強震の被害より相應に免がれしめませうではありませんか、然るに實際は強震が起れば忽ち大騒ぎであつて幾萬の人命を失ふのであります、これが肝腎であります、この土地の保險が第一に實現されずしては、農村の安寧厚生はない筈であります、これはひとり農村のみならず都市でも左様であります、ところがどうです都市でも農村でも人生上斯かる肝腎要めの急所が一も整つてゐないのが我邦の現状であります、これで世人が安心して、否、安心してゐるかゝるまいか知りませんが、營々醒醒してゐるのは、あんまり先きが見え過ぎぬと謂はねばなりませんまい、これはどうしても住居地として乃至農耕地としての安全は是非最初に之を固ねばならぬ。

二

農村全體の安寧厚生を圖るには先づ居住地乃至農耕地の絶對安全を期せねばなら

ぬ、それには色々な方法がありませう、日本全國の地質状態に調査されてあるのだから其地盤の堅硬軟弱に應じて之れか居住地として構造を爲すこととあります、居住地のみが住居的に安全なれば農耕地はどうなつても構はぬといふやうな考をもつものもありませうが、生を保つには食物を要する、此食物は耕地より生産せねばならぬから農耕地の絶對安全が必らず居住地の安全に伴はねばならぬ、若し人が空氣や水のみで永く生命を保つことを得るならば、もとより斯かる土地の心配は入らぬがこれは話しだけでどうしても固形の食物を要する食物は之を國外より供給すれば差支ないといふを得べけんも、ロハでは食物はどこからも來ぬそれだけの物資を要する、此物資を作るのは固より農地であるから農地の安全は是非居住地の安全に伴ふのであります、農耕地は陥没し乃至崩壊滅失しても人生とは直接又は時間的に關係がない、即ち他より食物の如きを輸入するを得るを以て、それ迄手を着けるのは大變であるといふ方々もありませう、併し農地は人生の依て立つ物資を供給する

生産機關であつて、且つ人命を保維する物資を購ふ財産であります、此財産なくば人は遂に路頭に迷ふことになる、これは今日現在の社會制度乃至經濟組織では到底どうすることも出来ぬのであります、營業の自由は憲法上の權利であるが、其代はり失敗をしてもだれも構ふては呉れぬ、損得とも己れの双肩に擔ふのが今日の社會上經濟上の原則であつて、裸貫て生活は出来るが、此裸貫の生活は餘り望むものはあるまい、蓋し裸貫の生活は立派なものであるが、並大抵て之を凌ぐることの困難であるからであるし、且つ今日の社會制度は之を輕んずるも已むを得ないからであります、でありますから誰れも財産を所有することを今日處世上唯一の根本とするのであります、ところで此財産の根基は土地に在るのであるから居住地の安全と共に農地の安全を絶対に保障せねばならぬ次第であります、これが實は今日の政治の要諦であります、然るに此肝腎要めの政治の要諦が其儘に放つてあつて、謂はば枝葉の問題に盡力して居るとは思へば情けない次第であります、勿論此枝葉の問題

とて其儘放つて置いてよいといふ譯ではない、それも十分盡力すべきではあるが、肝腎の土地の絶対安全が保たれずしては、農業教育も技術も衛生も、交通も其他何か何でも一朝にして其努力の結果も成績もだいなしになるのであります、若し再度九月一日の如き強震起つたとすればどうであります、思ひ半ばに過ぎませう、固より強震はあるとしても何時あるか分りもせぬことであるから斯かる譯も分らぬ、或は起ることも分らぬ縁喜でもない例を援くにも當らぬが、實際譬へてみればそうてはありませんか、ですから農村全體として其安寧厚生を完うするには、如何しても農耕としての地盤乃至土壤の絶対安全が人生第一として來るのであります。

三

敷地として農耕としての土地の絶対安全は斯の如く人生重要此上なしである、之は獨り農村のみではない、都市でも同じである、又農耕といふ意義は地産業としての林産水産をも包含するのであります、廣義に於ける農業を指すのであります、農

業の發達をはかり農村の繁榮を致さんとしませうならば、斯かる人生萬事の基本たる地盤乃至土地の内容の絶對安全を保障すること何を措いても必要第一とすることは斯の如きものであります、さて其絶對安全の保障は如何して之を實現するか、それは地質學乃至地震學の智識によりて之を豫防するのであります、その豫防方法乃至工事は工學の掌どる所でありませう、特に土木工學の主として掌る所であつて又一方に於て農業工學も固より之に参加せねばならぬ、然れば土地の絶對安全の保障は之を機械的に實現するものとするのであります、然るに實際に於ては單に機械的だけでは完全に其安全を保障し切れません、縦し機械的に保障を實現し得るとするも、其保障資料の由て來る根本は經濟力であります、機械的設備は物資に依て之を作るのであります、物資は則ち經濟其もの、掌どる所であります、茲に於きまして居住として並に農耕としての土地の絶對安全の保障は一は保健の意義と一は保險の意義を兼ね備へねばなりません、保健とは則ち土地の使用支障がどんなことがあつても起らぬことにするのであります、保險とはどんな時にもどんなことが起つても平氣に之を使用する資力を具ふることでありませう、どんな強震があつても、如何んな大火があつても狼狽することなく平氣に居住として農耕として土地を其儘利用収益することができざる様にするには、固より勞力が入ります、勞力は自己之を提供することを得るが、力足らぬときは他より之を仰がねばならぬ、此際の勞力は之を資本に仰がねばならぬ、即ち資本をどんな時でもどんな大事が起つても、いつでも平氣に之を設備することを得せしめねばならぬ、それには保險によるより外ありませぬ、土地の保健作用によりて土地を滅失毀損するやうな事は起らぬ筈であります、併し不可抗力のことであるから、それは豫想外のことがあつてどうとも分らぬ、さうすると或は思ひもよらぬ強震が起つて或は山崩れがあつて津浪が來て土地を滅失毀損するかも知れぬとみねばなりません、此際には保險の作用によりて土地資本を失はぬ様にせねばならぬことはいふまでもあります、してみますれば土地の保健

と保険は是非とも併せ之を實現することをせねばならぬ、之れを併せ行ふ組織は如何にすれば最も完全を期し得べきか、但し之れは併せ行ふ組織にせねばならぬとは限りません、別々に之を行ふて固より差支ない、但し其効果が支障なく行はるることが出来ればそれで足りる譯合であります、此意義からして農村厚生策としては差當り土地改良事業治水事業は我邦に於ては眞先にせねばならぬ、そして農作保険をせねばなりません、此二政策併せ行はるゝ曉きは農村の厚生が現はるゝことになりませう。

四

農村厚生問題の基點は農村及農民が依て立つてゐる地盤それから其地産力を保障するばかりではない其生産物の存立や成熟をも安全確實にせねばならぬ、其地盤や生産力の保障は所謂土地改良であるが、土地と其生産物乃至生産力を自然の不可抗力から生ずる危害より如何なる場合にも完全に免れさせるのが目的であります。土

地改良は農學に謂ふ所の範圍よりも遙かに廣大であつて耕地整理などは無論のこと、河川の改良を包含するのであります、河川の改良といへば甚だ廣い意義があらまして、何でも河川の流水水流がよくなり其灌溉排水が便になるやうな施設工事は凡て河川改良の中に含まれます、河身の掘鑿、河心の浚渫、堤防の修築改善、河流の屈曲を直くするなどもそれであり、所謂耕地整理の眞の目的は土地を保險するのであつて單に田畑の區劃を正すのみではない、田畑の區劃を正すのは却て眞に耕地整理ではないのであります、凡そ稲作をするに水の入用なる時と不用な時とあります、入用な時に水がなければ稲作上不利の結果を來しますが、それと同じく不用の時に水が田區に存在することも同じく稲作上不利益であります、之れがため稲の登熟が遅れるし、穀粒の品質もわるくなれば稲の抵抗力も概して弱くなりませう、此等のことは農藝上の技術に關しますから茲に謂はなくとも讀者諸君の諒知せらるる所でありませう、要するに土地改良とは農學にいふ所と土木學のいふ所を兼ね行

なわせ、そうして土地、地上物、地産物、凡ての目に見ゆるもの見えぬもの苟くも農村と農民の土地に關する生産の根原の安全を保障するものと解せられて差支ありません、そう廣い意義に於ける土地改良は從來行はれてゐないやうであります、自分の寡聞の致すところもありませうが、そういふてよろしいと思ひます、その證據には耕地整理には耕地整理講習の修業者が之に當ることになつて居り、そうして土木工學を學ばんものは農學の講習を受けることになり、農學を學んだものは土木に關する工學講習を受けることになつて居りますが、併し道廳府技師として農業工學専門學者乃至はそういふ技藝に通じた人が任せられてゐませうか、どうてあります此點に就ては自分は尤も力癪を入れなくてはならぬ。

五

農村や農民をして其自然力より受くる危害から何時でも完全に安全を保障せうとするには前に述べたやうな施設を是非せねばならぬ、然らざる限り農村及農民の厚

生は何としても十分に生れて來ません、此ことは絶對であります、今日の我農村及農民はどうてあります、これは獨り農民のみではありませんでせう、苟くも農村に居住するものは亦害を免れることは出來ないのであります、水が出た、風が吹いた、雪が降つた、霜が下りた、ホソに少しばかりの水ならばそれほどでもありません、風でもそうだ雪でも霜でもそうてす、然しながら苟も作物を害する程度に此等の天然力が來ますと早速農村及農民は其安寧を亂されます、忽ち物議を生ずることになります、甚しければ一村一部落のみではありません全郡全府縣に漲ぎるのは當然であります、所謂河川の名義を有する河流が氾濫しますと致します、其全流域は之は一縣下の一部分のことはありません、大抵全縣下又は數府縣下に涉りて其流域をもつて居りますから、數萬乃至數十萬の農民は其生命財産の安全を或は全部或は大部分或は小部分奪はれます、之れがため一朝にして流離顛沛の現象を呈するのであります、徳川時代にありては斯かる場合には幕府は忽ち賑恤を致します、名主大屋は

之れが救済をつとめます、之は何のためかといへば親子主従の関係があつたからであります、勿論同胞といふ道徳上の感念からもそう致しませう、又居住を同ふしてゐる又居住を接してゐるといふやうな関係からさういふ賑恤なり救済なりを致すことになりませうが、其眞の根本は主従親子の関係があるからであります、ところが今日の世ではさうではありません、主従親子の関係は勿論ありません、法律的になつては固よりのこと政治的にもありません、昔しは親作は小作をば憫れみました、是れ伍人組の命ずる所でありまして、若し組合中に無告の民が出来れば伍長たる組長の落度であります、伍長は罰せられます、名主もたゞでは居られません、まきどひを食ひます、でありますから、どうしても無告のものを見捨て、居る譯には参りません、組合員中病氣其他の原因にて農作が出来ず従て年貢が納められないやうなことがあるとみますれば、他の組合員は相揃ふて其不幸な組合の田作をして遣らなければなりません、イヤ遣ります、さういふ風に政治上農作は連帯責任であります

した農作といふよりは貢納といふ大切なお上へのつとめは連帯でありました、既に連帯でありました、一人でも怠れば側の人に迷惑を懸けます其代はり主従上下の別は儼然として立てられて亂すことは出来ませんであります。

六

さういふ風でありましたから一朝風水の災が起つて自他ともに困るといふ段になりますと誰れ彼れとなく一齊に之れが回復に奔走致します、親作小作は論なく主従の関係があります、名主と其小前もさうであります、旗本と其部下大小名と其百姓、皆さうであります、將軍と大小名、これ亦同じ関係でありました、唯其大小懸隔に相違があるのみでありました、立所に賑恤救済が成り立ちます、其效を奏したのであります、然るに今の世にありましては中々さうは行きません、と申しますのは河川法もあります道路法もあります、水路組合法もあります備荒儲蓄法もあります、一朝不作あらば備荒儲蓄米を賣出しますことになつて居ります、法律の獻立は出来

て居りまして完全と行かない迄も相應に整ふて居るのであります、左りながらさういふものの實際施行上幾多の障害がないではありません、一朝事あれば直ちに實行し得る規則になつて居ても、法治國の常としてオイソレと行きません、若し直ちに手續を抜きにして致しますと忽ち法の命ずる所の罰を受くることになり、煩雜苛重なる手續實際は無用な手續でもそれを踏まねばなりません、今新しい一例を以てすれば今回の關東大震災に就て御見舞金が下賜されました、これが中々罹災者の手には入りません、ヤツト十二月の下旬にやつと彼等の手に渡る次第でありました、凡そ百日足らずの無用の日がかゝりました、それは無用とはいひますまい、實際上海種々の調査を要するからであります、併し御下賜御思召から申せば無用であると思はれたい、どうでありませう、そうぢやありませんか、若し此無用な手續を踏まず行れば、後日法の制裁を官吏はそれ／＼受けなければなりません、又其間さういふ手續上の缺陷がありませんかと所謂虎視眈々眼を皿にしてほじくる反對

黨の政黨屋さんが陳取つてゐます、うつかりのことは出来ませんのも尤もであります。

七

尤もでありますが實際一日も早く賑恤を受けなくては立行けない立場にある人達は泣かされずには居れません譯ではありませんか、これも其もとをよく／＼質せば、昔時の徳川時代と今の時代と政治組織も社會組織も何もかも異なるからであります、昔時ならば斯かる場合には奉行なり代官なりは一言の命令の下に早急に時を失はない中に救恤の實を擧げて十分百姓を悦服させるのであります、それが出来ないのが今の世であります、苟も名奉行のやつたことは皆さうであります善政でさへあればやり方はどうであつても差支なかつたからである、善政其ものが物をいふてくれる、善政は乃ち幕府の賞揚するところであつて、その場合手續上誤りがあつても大目に見逃したのみならず、却て機宜の處置として之をみとめたのである、さうい

ふ政治と今の政治とは根本的に違ふのであつて、政治的には既にその通りであつて、法律的には主従の關係はない親作や小作の關係は法律では認めない一視同仁である、同等の權利義務の下に立たされる社會的には既に主従の關係は政治上にも法律上にもないのでありますから、それは不動の金しばらくで借金のある小作者は貸金のある地主には頭が上らぬのは實際ではあるが、表面では社會的には同等の應對をなし得るのであります、個人的には地主と小作と仲よく應對しますが、既に地主の家を去り自分等の仲間入りをしますと、階級的の立場に入込みます、これは人情の弱點として已むを得ません、イナ人情の弱點といふのは語弊でありませう、今の世ではこれが正當のことでありませう。

八

さういふ次第でありますから今日では損得とも皆一人で負擔するのであります、昔時のやうに損得も多勢で組合同志で負擔するといふことは出来ません、尤も社會

思想のズツト進んで所謂連帶思想の實際に行はれる社會となりますれば、また別てありますが、今日の我邦の社會事情では、到底さういふ連帶責任は未だ毫も起つて居ないと謂はねばなりません、昔しは損をしても一人で負擔せず、其代り得をしても多勢で之を割前にするのであつた、今では儲ければ一人占め損をすれば、一人貧乏といふ始末なのであります、そこでさういふ時代にありましては何人も儲けのみにして損をしないやうにせねばなりませんこれは旨い話した、併しそんな旨い話しが實際出来ませうか、怪しみます、併しそれは出来ませう、どうすればよいでせう、儲けはこれはどうも受合ひかねませうが、損だけはしないやうになりませう、損せぬといふのは苟も資本勞力を投じた仕事は必ず其投じた資本勞力よりも大きい出来榮えを擧げるやうにすることでありませう、それは不時の不可抗力から生ずる災害から完全に安全な保障を確得することに過ぎませぬ、營業上投下した資本勞力がなくなるのは未だしも其肝腎要めな基本たる地盤乃至地産力が一朝の不可抗力の

ために奪ひ去らるといふことが有り勝ちの今の有様では農村居住者乃至農民はいつ何時損をするとも限りません、それは儲けをすることもありません、今日の世界大戦争では農民は十分儲けました、濡手で粟を握みました、これは誰れも知つてゐる事實であります、これは一例に過ぎません、こう一般的に農民が儲けをしたことも他にありません、今申した事實は中でも大きいとして最近の實例でありませう、が其後は農民は損をして居るといひませう、米價は下りました、繭價は安くなりました、高い安いは比較的ではありませんか、とにかく高かつた産物が安くなれば損をしたことになりませう、そうして其米價や繭價の安くなつたのは自分のせいではない、自分はいつでも一生懸命に寧ろ勉強せないまでも怠けずに働いて居るのであります、而かも其實際手に入れるものは以前よりは少ない貨幣であります、これは何としたことでありませう、甚だ馬鹿げた咄してはありませんか、いつそ遊んでゐた方がよかつたなどと申すことになりませう、これは本當に無理もありません、勿

論農業であつても所謂商業にいふやうな儲け仕事は出来ないのではない、それは生産費を減じ生産物を高く販賣すればよいのであります、種籾代、肥料代、労働賃其他の生産費を減じて而かも農作上効果を大きくするやうに農術を工夫し生産品たる米穀其他のものを高く販賣すれば儲かる筈であります、ところがこれは米價が上がつた絲價が上がつたといふ一般的儲けのやうに皆が皆やれるものではありません、或る人は出来ませう、或る人は出来ませう。

九

そこでです、損を絶對的にしないやうにせねばなりません、所謂投下勞資を絶無にするやうなことに絶對的に出合はぬやうにするのであります、それは本文の冒頭にいひました、土地及地産力の絶對安全策を施設する外はありません、これは是非農業従て農民といふ立場からして國家に要求してよいことでありませう、今日の有様より推してゆきましたならば農村居住者は益々貧乏いたしませう、農村居住者貧乏

しますれば農業は立ちゆきません筈であります、農業立ちゆかずして社會は平穩に國家は安泰になれませうか、誰れもそれでよいとは申されはしませんまいが、或はそう一概に農業は衰退する筈はない、東京のやうな大都市は十數縣位の富を生産するから、農村の衰退の如き餘り大げさに見ることを避けなければならぬといふものもありませう、又縦し農村居住者のため其生産及居住の根本たる地盤乃至生産力の保障を絶對安全にする施設をする必要あるとしても、斯ういふことは莫大の資金を要するから、急速には出来ぬといふ方々もありませう、さあそこであります、大東京は十數縣の富を有するといふことはそうでありませう、そうであるとしたところで、其富力はどこでどうして生るゝのでありませうか、都會民が作るのは相違なからうが、其富は單にこつちのものをあつちに動かすに過ぎないで一方の人は損をし他方の人は得をする、單に富の移轉に過ぎないやうなことはなからうか、眞に其富を生産されたものであるであらうか、どうも皆んな生産された富ばかりであるとは

申されませまい、有用價を増すのは富の生産でありませう、併し貨幣價の増加によつて富の増大した形の統計に現はるゝことはよくあることであります、農業の富は眞の富であります工業の富も大抵はそうでありませう、商業の富に至つては必ずしもさうでありますまい、工業の富の有用價を増すといふことすら或る學者は之を奢侈など申してけなします、まして奢侈的類似品を一ヶ所に陳列して需用者の心を奪ふやうな商業はどうでありませう、或はなくてもよいのではありませんでせうか。

十

富は本統の富でなければなりません、本統の富の生産は農業獨り之をよくしますと申してよろしうございませう、そういふ富を生産する農業が衰へることになりましたらどうでありませう、大都市のみでよく國家社會を永久に支え得ませうか、心元ないではありませんか、農業が衰へることは農村居住者のへることであります、

古來學者の調べたところによりますと農村居住者と都市居住者との比例はどうしても七と三乃至六と四の比例を保たないといけない、此比例を失ふと國家は安寧を害ふといふて居ります、何しろせまいところに、よしせまいところでなくても多數の住民蟻集するといふことは國民の保健上悪いことには相違ありません、これは何人も否むことはできません、それでありませうからどうしても農村居住者の居住並生産地の絶対安全を國家は保障しなくてはなりません、前者は之を後者に要求すべきものであります、獨り農村居住者のためではありません、國家社會全體のためであります、都鄙全體のためであります、都市と農村との關係上是れは是非そうしなくてはなりません、此の項にのべたところは前項と重複したところもありまして分つたことをくどくど申した嫌ひもありますが、實は我邦では河川の改良と土地の改良と農業の保險と農民の厚生と農村の振興と根本的に深い相關の原理があることに心を潜むるものが甚だ少なうございます、これが甚だ遺憾なことであるば

かりてはない遂には國家の患となりませう、よつて茲に重ね重ねこのことを申しのべたわけであります、従て私は世の農を尊ぶもの又は農業論者のいふ所多くこの永久な根本原理に觸れず一時的瀾縫策にのみ走るを指摘したいと思ひます。

十一

前段を以て苟も農村人士乃至農業の據て立つ所の地盤たる農耕地乃至住居地の絶対安全を策せねば農村の振興農業の發達期して俟つべからざる所以を概述致しました、而してその如何にして斯かる大げさな目的を遂げ得るかといへば、廣い意義の土地改良即ち治水乃至耕地整理を斷行し同時に農作保險を施くにあることを述べました、果して斯かる思ひ切つた而かも農村の急を援ふに適切なる永久的振興策を實際にすることを得べきか如何うか甚だ疑はしい、それに今の人は眼前の利害のみに囚れて永遠の計を迂とするからである、年々の水害は之を評價すれば農作物の損害額にても數千萬圓二三年も續けば忽ち億圓に達するのであるから思ひ切つて水害の

根本を絶つこと根本的に重要で而かも眼前の策として適切の價值あることを否むわけにはゆくまいこれ單に水害のみでそうである、況んや他に幾等も農村の厚生を脅かす事情は數ふるに違あらぬほどである、それであるに此農村を脅かす危険を取り去ることを怠つて農村振興イカデあるべき。

扱前述するが如き農業乃至農村人士の據て以て立つ所の根本的安全成りて後は如何にすべきか。

十二

それは農村の厚生問題として中々數多き事項を擧げることが出來ます、先づ住居の問題であります、農業者の住家の如何に不健全なるかは誰れも否むことは出來ますまい、豚は汚ないものとして取扱ひます、而かも豚は清潔に飼養しますれば其生産價值もズツト高まりますことは、實驗の證する所であります、ところが豚は却て不潔を好むとして無暗に不潔に飼養して顧みない、若し豚にして口をさくならば人

間の無情をかこつてあらう、之を清潔に飼養せずして尙相當の生産價值を供するは、豚が天性頑健であるからである、農業者が衛生を顧みずに住居に煩はされずに業務に就くを得るは、自然に衛生的な野天に終日労働するからで身體の強壯なるに主として因るのであらう農村の病氣の種類は中々に多く而かも之に罹る病人の數も尠なくないのである、但之を憫へざる所以のものは其口なきによることもあらうけれども俗に所謂がまん強い氣質の之を然らしむるのである、然るに農村人士の之に満足するものと做すものあらば甚だ片腹痛い、農村人士にも腹がへつてもひもじくないものもあらうけれども、多くは人並に腹がへればひもじいのである、だから近來農村問題も中々囂ましいことになつて來たのである、でありますから農家の衛生問題に就て深刻な注意を拂はねばなりません、住居問題に就ては家屋の建築、位置、間取り等それ／＼注意を專一にすべき點であります、尤も注意肝要なるは給水であります、井戸水は冬は暖たかく夏は冷かであり其味も旨く水道の水に比すべく

もないが、併し衛生的に之を吟味すれば甚だ缺點の多いものである、それは井戸側の不完全でもつて湧水差水を入れるからでもあるが、井戸水自體が初めから不衛生的のものも尠なくない、之れがため農村に特殊なる病氣が中々生ずるのである、故に給水装置は如何うしても完全にする要があります。

十三

次には學校の問題である、學校は到る處設置せられて今更不就學兒童もないやうな譯合であるが、其村落に於ける位置のよろしきを得ないで登校上随分兒童の無駄な時間を費さしむるやうなところは尠なくあるまい、これはゆく／＼改善さるとするも兒童の榮養問題はどうである、一體農村人士は多食である、がこれは習慣の然らしむる所で腹一杯喰べねば食事をした氣持になれぬからである、其上農村人士の主食が其分量を多く攝らねば十分なる榮養を供せぬといふ關係もあつて、自然に腹一杯に食事をする、且つ終日露天の下労働に従ふといふ消化をよくする所以もあら

う、併しながら單に肉體的労働に従ふのでなく、これより成人する身であつては中々榮養分の多い食餌を要するは當然である、茲に於て小學校兒童は家庭に於ける日常の食糧にては多くは不足であらう、所謂保健食を給するの必要があるのである、これは農村人士の大に注意すべき點であらねばならぬ、小兒は成人よりも滋養食を要するからである、ゆく／＼は晝飯丈は學校で給與するやうにしたい。

それは御尤な議論であるが、財政難で實行覺束ないと申されるに違ひない、併しながら他に不必要なる費用を省き若くは全く之を止めて小學兒童の榮養食給與に充當すればよいのである、私は田舎の小學校にては體操は無用である、都會にてこそ體操は有用でもあらう、これはよろしく給食費、體育費、娛樂費に振當てるに若くはないと思ひます、體操は無味であるから之を廢止して其費額を給食費乃至體育費に充つべしである、これは一例であります、私は先頃湘南の鐵道沿線の小學校に於て五六學年の女兒が揃ひの黒洋服を着て寒天に風の吹き曝らしの校庭に於て無味乾

燥な體操をして居るのを見た、そしてアレハ兒童の肝腎なる成長といふ目的のためよろしくあるまい却て兒童の發育を妨ぐるやうな結果を間接なり直接なりに胚胎させはすまいかと思ひました、ナゼかと申すと彼等の顔にイヤだといふことが讀めたからであります、若しそれが體操でなく何か娛樂的運動であつたら嘸かし彼等は喜んで嬉々として遊んで居つただらうと思ひました、遊戯の方がよい、體操も體育であるが體操は之を遊戯的體育とする方針を採つたなら兒童はイカばかり嬉しい事であらうかと思ひました。

十四

體育は農村にも必要であります、體操は必要ありません體操は概して無味乾燥であるからであります、農村は自然の背景によりまして、都會に於て公園が必要であると反對に公園などは入りませんが、體育は農村人士特に小學兒童には必要であります、自然には親しむことが出來ますが、其境遇によりて人と親しむことが稍薄い

ことは農村には免かるることが出來ませんのであります、それでありますから色々體育によりて楽しみながら相親しむことをさせたいのであります、自然に生れながら親しむが如く人にも親しむことが出来るやうにしたい。

都會に出ればさういふ機會もありますが、動もすれば不健全な分子の煩ひを受け易いから農村に於て居ながら體育をなさしむるに若くはないのである、これ一には農村と親しみを増す所にもなり、農村離反者を尠なくすることにもなりませうと思ひます。

體育の方法は色々ありませうが、私は之に關しては門外漢であります、併しながら我が日本農業雜誌には體育の欄を設け其道の専門家に執筆を依頼してありますから、ゆく／＼は此方面に於ける貢献を致したといふと思つて居ります、何卒愛讀者諸君の御後援を祈ります。

十五

農村の小學校は必ずしも白亞式の安洋館と限るには當らないと思ひます、保健上適當な建物があれば流用するに越したことはありません、或は村落と位置によりては米國風のキャンブも大に宜しい、林間學校は都會の學生達の保養場所とのみすべからずであります、色々の學校建築の式に則とりて、地利と人利のよろしきによりて之を建設する様にしたい、必ずしも全國一樣に都會も田舎も同じ風の學校建築にしないでよろしい、そう致しますと村落によりては村落相當の學校が出来而かも教育乃至保健の目的を達することが出来て、大に村費の負擔の輕減も行はれ、農村教育費の大節減行はれて農村自治も大いに舉りはすまいか、お互に研究しやうてはありませんか、教育費と土木費の負擔にて大抵の農村は泣かされて他の仕事に手をつけられぬといふ有様を見ても、茲に申出た案は一概に之を排斥すること出来ずまいと思ひます。

教育にも統一といふことは結構であります、併し統一はそれほど結構のもの

でありませうか、統一がなくても統一と同じやうな成績が舉ればよい、統一がいゝわけではない、統一は目的ではない手段であります、何も全國の學校が都鄙とも學校建築も設備も教授も皆まで統一を得なくてもよい、國民教育の目的を達することが出来れば、天幕張りでもよいではありませんか、小學校で農學ばかりを教授してもそれで結構、小學教育の目的を達することが出来れば、それで満足とすべしてあらう、都鄙一樣に入りもせぬ教授は止めた方がよいではありませんか、農學がそふいふ風に教授せらるる學問であり又さういふ學問を以て成り立て居るといふことは本書他のところにも一言したとほりであります。

十六

農村の教育費の節減が出来而かも當該教育の目的はそれで以て遂ぐる事が出来るものとするれば、それらの經費は農村の體育保健費に振當てることも出来ませう、或は必要によりましては他の社會的施設費に充當することが出来ませう、私は教育

などには統一といふことはどうでもよい、これは獨り小學教育の範圍にのみ限ることとはありますまい、統一の弊は我邦では他の方面にもありません、一體統一といふことは徒らに形式に趨りて内容を空にすることを免かれませんが、一定の形式を定めますと、其一定形式通りのものを造り出すと、それで既に目的を達したものと己れも解すれば人も解します、併しこれは單に形式が一定の型には入つたといふ事實であつて其内容の充實目的の遂行といふ肝腎の事はソツチのけにされる傾があります、イヤ動もするとソウいふ風になり勝ちの物であります、これは統一の弊であります、勿論統一にも美點があります、全國の都市の街並が一樣に揃ふといふことは美觀であります、全國の小學校がどこに行つても一樣なる建築で一樣なる教授材料で一樣な教師で揃つてゐるといふことは成程美觀であります、併しそれで本當の住居乃至營業の目的が達せられ、小學校の目的が本統に一樣に成し逐げられたら勿論言ふことはありますまい、が併し街並とか家屋とか其の住む具合とか、營業のや

り方は、其土地々々人々によりて異なるべきものでせう、都會の兒童と田舎の兒童は其體格に於て其氣性に於て其習慣に於て其環境に於てそれ〴〵異なりて居ります、人は環境の動物であります、それを融通のさかぬ一定の形式に當てはめて教育が出来ませうか、よし出来ても、それよりも他に遙かに融通のさくそれ〴〵に適した教育材料乃至方法を採用することにいたしましたことはありますまい、必しも統一といふ美觀に囚はれたくないではありませんか。

國民教育は獨り現行の小學教育のみに依らずとも農學教育によりて仕様によりて職業教育を同時に兼ね授けることも出来ませう、果してそつういふ風な教育が出来るとすれば全國教育費の負擔は餘程へりませう、國民教育と職業教育と紳士教育とが一舉三得といふわけになります、紳士教育といふのは紳士たるに相應はしき教育、即ち理化博物の自然科學乃至法律學經濟學社會學といふやうな社會科學の教育を農業教育によりて大要仕付けることが出来るといふ意義をいふのであります。

十七

そんなことがどうして出来よう、それは現行法規に矛盾することであるといふかも知れません、それは統一といふ病に罹れる現行法規の前では出来ずまいといふ方が本當でありませう、併し現行小學教育でも理化博物の知識は純然たる理科博物的教材によりて教ふるよりは、又模型圖様によりて授くるよりは、農村にありましては田園乃至教室の附近にある自然の實物に就て授くるに若くはない、これは教師の農學知識の厚薄深淺によりて異なりませうが、却て書物とか模型標本などに就くよりは遙に其授業の目的を達することが出来ませう、でありますから學校では何でも模型標本を規定通り備へる要はないのであります、統一は原則として破つてもよいといふことになります、此點に於ても教育費の節減が出来ませう。

そいふ風な教育を農村でする様になりますと教師の選定は忽せにできません、相當の經歷あり眞に教育といふ知識經驗に富んだものを採用せねばなりません、

併し一定の形式に則とらないで苟も國民乃至職業教育の目的を達しさえすれば、其教材乃至教授方法を一定することはないのでありますから、教師の數は餘程へりませう、又教師は一村に定住殆ど永住するといふ關係が自然に起らねばなりません、相當多額の給與を要ませう、併しそれほどの教室も要しない、其代はり學校の數は各所適切の場所に容易に出来ますから數は多くなりませう、多くなつても經費が餘計掛るわけではないのであります、獨逸あたりにゆくと役場といふ我邦の農村に見る様な見式かゝりたる役場はないといふことです村長さんでも校長さんでも誰が何だか一寸見分け難いといふ有様だそうです、それだけ役人根性はうせて所謂今日の流行語たる民衆化してゐるのでありませう、學校も役場も農會も凡てがそいふ風に何だか分らぬといふ風であつて、而かも皆それの目的をあげて居る、これでは經費は入らぬではありませんか、家に居れば錢は入らぬ、旅館にゆくと澤山の錢が入る、而かも衣食住の眞の目的は却て前者にあるといふことは誰でも否むことは出

來ますまい、我農村もさういふ風にありたいではありませんか。

それでは役人風はどこにも吹かぬで、何だか物足らないと思ふ方もありませうが併し家庭内にあつて主人風を吹かすものほど社會的には價値のないものでありますから、斯かる思想は今日の時代ではモハヤ捨つべきであります、教育は何を措いても農村の根本であります、農村の厚生問題としては尤も重要な意義があります、思はず長くなりました。

結 論

農村厚生問題と題して、前段數萬言に亘り、大要其意義を述べたつもりであります。然れども、所謂厚生問題の凡てに就ては今尙十分に考へがまとまつて居らぬ所もあります。その邊のことは、他日に譲り。既に數萬言も述べたのでありますから茲に結末をつけます。

一體厚生といふ字は英語のウエルフェア(幸福)であります。幸福は即ち所謂國民の最大多數の最大幸福の幸福でありまして、無論ベンタムの實利主義に出てゐるのであります。實利といふと、空想ではない、抽象的ではない。日常の生活を利する範圍のもので、又利する程度のものでなくてはならぬ。我等は一體現實的のもので國民一般は利益即ち實利のあることでも、自分の實際それによつて利益する程度が、なるほど、これならば働らき甲斐がある、骨折甲斐があるといふ位に少なくともゆかなければ、如何に利益があることで、實際それも遣れば利益のあることでも、やらないものであります。又其の範圍でも、日常生活の事柄でなければ俗にいふヲツクウだといふて、やるものではない。成る程、やれば實際其れ丈の利益即ち實利があつてもやらない。やる段になるにはその實利はやる丈に多くなければやらぬ。尤も此多い少ないといふ度合は、社會階級が異なると異なり、同社會階級でも嗜好が異なれば異なり、又人物が違へば異なり、又習慣の異なるによつて一様では

あるまい。兎に角働らき甲斐がある位に營利がなければ、やるものではない。これは我等の弱點であるが、實際どうしやうもない、今度の奢侈税なども、此例に洩れまい。其税のよしあしは別として。又其觀念のよしあしは別として。實際當局者の期待する丈の好結果があがるかどうか。或は案外擧がるかも知れない。人によりては寶玉、貴金屬類が貴かくなれば、今更らひと工面をしても、之を身に纏ふかも知れない。そういふ人物も可なりあるだらふ。併し之を幸にして自己及家族の虚榮心を矯めるかも知れない。これは一に其人の所得の多寡によりませう。勿論人によつては所得にはかまはず貴い贅澤品を買ふてありませう。買はふにしても中には買ひたくても世間體を繕ふて買ひ得ぬ人もありませう。彼是相俟つて今度の奢侈關稅増徴が好果を奏する作因となるかと思ふのであります。

一體日本人の經濟思想は變であつて、ばかに經濟主義でやつてゐるかと思ふと、そうでもない。その經濟主義だと思つてやつてゐることが實際非常に贅澤であるこ

とは、随分あります。例へば安物買ひがそれてあります。安物は出す貨幣は少ないが、實際品物の効果は永續しませんから、その直段は高いことになるのであります。第一日本の家屋がそれてあります。マッチの箱の様な體裁はどうであります。英國ならば道具によりてあります、出す貨幣は多くても、眞の直段の安い物を買ふのであります。即ち、家屋ならばアパートメントに致します、これが眞の經濟主義であります。そうじて擬物はまがひものは錢は安い、その實、高いものであります。ところがそういうまがひものは日本には素敵に多い、際物などは其性質として高いものであるが、この際物商賣を日本人はやりたがる。此際物商賣があたれば、成程儲けます。儲けは儲けるが、其儲けは續かない。やがて商賣換をする。するので金がかゝる。そんなことで儲けをすつてしまふ。日本人の初物買ひがまたそれてあります。初物を賣る、高い儲けをやるやうである、併しそれにかゝる金を永久的に使ふとしたら、其金は餘程生きませう。初物其ものも、七十五日生きのびる

かも知れないが、あとで腹が病む。薬が入る、ひまつぶしである。結局は損亡といふことになる。

それで厚生といふと、農村の利用厚生になることをやるとしたにしろ、従来のやり方では駄目であります。厚生が厚生にならない。一時的であつて贅だ錢を使ふのであります。贅だ錢を遣ふことは、右様のわけあひでありますから、一番先きに避けたい。それには農村の厚生第一として、農業保険である。保険が成立たねば、日本の農業は駄目だといふことを高調致します。所謂小作問題でも農村問題でも、乃至は作物問題でも、住居問題でも、教育問題でも、保健問題でも、體育問題でも、交通問題でも、苟も農村の依て立つ所の、乃至は農の依て立つ所の土地の絶對安固が成立たねば駄目である。其等の問題解決に遣かつた錢は皆無駄となつてしまふ。澤山もないおあしをそんなに遣ふそれを贅澤である。一體政府はそういう贅澤に課税する方がよいのであります。そうすると、政府は政府のやつてる事業乃至施設

に奢侈税を課さねばならぬことになりす。先づ少しでも地震がすれば潰ぶれる様な諸官廳、學校其他の建造物であります。彼の水害復急或修繕に使ふ莫大な國庫資金なども、其最大課税物品の價値があります。如何に貧乏な國でも年々の水害復舊費をチビ／＼と支出せずに一度に支出して一齊に復舊工事をしたならば、こんなチツポケな國土だもの、そんなに年を重ねずして、全國の水害の原因を全滅することが出来ませう。

不可抗力のことでありすから、人爲的に之を豫防乃至除却することは、そりや出来るとはいはれませすまい。併し殆どそれは出来ませう。出来ないところか、今迄のやうに年々に少なからぬ金を無駄に使ふ贅澤を、此貧乏國ですることがなくなる丈でも、大變な經濟主義であります。どうかそうありたい。そうして一方には農業保険を思ひ切つてやりなさい。これは出来ぬ相談の様に思ふ方もあるが、獨逸の或る州では二十五六年前に既に各種の農業保険をやつてゐるのだ。其後どうなつたか

それは人のことである。人の疝氣を頭痛にやむことは入らない、日本の農業は安全ではない、農業は公債と同様な安全のものだといふことは、今は通用せぬ論である。論より證據。現時の農村の状態を御覽なさい。風前の燈火、其ものゝ様ではありませんか。これはいつも不可抗力の天變地異に打勝つ準備設備をせぬ上に、保険を怠たからであります。よし不可抗力に打勝つ準備はしてあつても、人爲は天然に絶対に勝つことは難しいから、其ため保険をやつて、萬一其ういふときの第一の用意をすべきであります。そうせねば、日本の國柄では、到底農業は立行かぬでありませう。

前段に於いて農村の厚生を圖るには、先づ、どうしても地盤の安全を圖らねばならぬ。これが根本的である。地盤の安全は農村居住者にも土地を耕やすにも、同じ程度に於て必然的に重要である、言ふまでもなく人の安定には地盤を要する農作物を作るには地盤がなくてはならぬ。これは嚴密にいへば、地盤がなくとも地盤の上

層を構成する所の土壤があれば差支ない筈である。農業には地盤は必らずしも必要としない、土壤はなくては農業は出来ない、絶対には出来ないとは言ひまいが、少なくとも繼續的に収益ある農業を営む事は出来ない。こんな事は別に多言を費やすに當らぬといふかも知れぬ、併し地盤が崩れなくても其上土が流れ去ときは農業は成立たない地盤は崩れても上土さへあれば農業は出来るのであります、ですから多言を費やすだけの價值はあります。

地盤を崩さぬことは農村居住者の敷地として絶対に必要缺くべからざることであり、そして上土を流さぬことは、農業者のためにまた絶対に缺くべからざることである。去れば此絶對要件を失はぬことは農村厚生問題として眞先きに解決せねばならぬこととあります。それで結論の眞先きに前段に之を述べたのであります。次には此根本的要件が解決され、農村居住者は安穩に居住することが出来、農業者亦農業を安全に營むことが出来、一朝天變地異のため鋤を捨て種子を種子なしにするやう

な不幸の事が起らぬとなつた後に、重要なことは何でありませう。それは色々ありませうが、先づ其主なるものだけを述べたい。

それは農業を営むに是非なくてはならぬ労力を安く使ふことであります。安い労力は畜力か機械力かに越したものはありません。機械力を使ふには色々な動力がありまして、これが又安いのであります、石油發動機、電力機（モーター）がそれです。でありますから農村居住者なり農業者だれなりとも労力が入用のときは、此の安い動力を自由自在に使ひ得るやうな設備を是非つけねばならぬ。それには個人で單獨に設備する場合もありませうが、又共同的に此設備を利用するといふ場合もありませう。孰れにしても安い労力をいつ何時なりとも自由自在に使用するやうでなくては、農村の厚生は成立するものではないのであります。そこで當時流行の農業の機械化なり農村の電化といふことがきたのであります。農業の機械化は固より單に農業の機械化だけで済みますのではありません、農村の電化亦然りでありまし

て生活上又此等の機械なり電力なりを満遍に用ひることとあります。差當り農村の電燈を設備すべきであります。そうすれば農村居住者の生計上乃至營業上の能率は十分に擧がるやうになる筈でありませう。

けれども、さういふ風に機械なり電力などを自由自在に使ひ廻すには、それだけの知識が先づ必要であります、そこで農業教育として従來の學科組織に變改を加へねばなりません。少なくとも機械學の科目を加ふることを要するのであります。機械を使ひこなすだけの知識だけでは足りません。機械は隨時いたみますこれはますから、之を隨時修繕する設備をもたねばなりません。修繕する知識は機械學の知識に伴ふて理解できませうが、機械を修繕する設備が同時になくては、役に立ちません。即ち木工鍛冶のことを知り且つ之を行ふ腕がなくてはなりません。そこで農業學校では機械學の外に木工鍛冶の科目を置くべきであります。此等の設備がありますればチョツとした機械器具の損傷は農家自ら之を修繕することが出来る筈であつて、

それで始めて機械器具の完全な遣ひ方が見らるゝ譯合であります。これまでのやうに一寸とした時計のくるひも直ぐ町の時計屋の手を煩はすといふことは營業上乃至生活上とも非常に損のかゝることであり、時を無駄に使ふのであります。農業學校としてはこれからは、是非簡易な機械學科と木工學科乃至鍛金學科とはなくてはなりませんのであります。

機械や電力を自由に取扱ふことが出来、其設備もあり、一旦損傷あるときは直ちに自ら之を修繕する知識技術と其設備があれば、それで農村の厚生が全ふすることが出来るかといへば、もとよりそれでは足りないのであります。農業乃至農村の仕事は男の手ばかりで出来るものではありません。日本の農業は女の手によることが中々多い。殆ど女のかよわい手によるといふても過言でない位であります。日本は女ならては明けない、とは此の意義によるものと解せられます。人生に於て食糧の生産が昔女の手で専ら生産せられたので、世は女ならては明けぬのであつた。それ

ほど女の手は我が農業になくはならぬ情態であつた、これは今も尙依然と變らぬのであります。さうしますと、此農業を負ふて立つ所の女子が矢張り機械の知識之を修繕する所の知識もそれ相當に備へなくてはならぬことになり、そこで女子農業學校は農村になくはならぬ。これは簡單に男子農業學校と併置すればよいのであります。然しながら女子は獨り野良仕事をやるばかりでない。却て其主腦の働らきは家政萬般のことにあるのでありますから、この女子農業學校はつまり女子農業家政學校でなくてはなりません。そうして女子家政學校は獨立しても男子農業學校と併置してももとより差支ないのであります。

更に進みまして、右の如き農業を取扱ひ農村に在りて文化生活を營むに必要な知識技術設備が出来た。即ち料理の獻立が揃つた。そこで此料理を爲す所の室が固より必要であります。室とは農場であります、此農場は機械や動力を自由自在に取扱ふやう適してゐなくてはなりません。從來のやうな農場では單獨經營であつては到

底不足であります。共同經營でやることゝすれば、皆々の室を合併して之を取扱ふことが出来ますから間に合ふことが出来ませう。それにしても在來のやうな農場では到底十分な有利な管理は難かしいのであります。茲に於て農場を相應に廣くすることが必要となつて來ました。どの位廣くする必要がありませう今迄は僅か一町足らず、そこゝであつた、これは全國平均の勘定であります、これは是非二三町乃至四五町位あつて欲しい。さうすれば之に機械、動力の設備をもつて十分に農業經營をすることが出来、かねて農村に相應した他の社會とも併行して立派に文化生活を營むことが出来、今日の文明を享樂することが始めて出来ませう。こうなつてこそ農村文明の使命を果たすことが出来ることになります。今日の都會の醜態は甚だしいとしましても何といつても今日の農村では居ながら文明を味ふことが、如何に最負めにみても出来ないといふはねばなりません。自然を樂むことは人生を離れるのではない、又人爲を退けるのではない。人爲と相合致してこそ始めて其本來の精神

魚もおれ今世は人のこゝろをよるよとてうたへり

を體得することが出来るのであります。

斯くてこそ農村の厚生始めて起り農村の文明が曉鐘を鳴らすことゝなります。斯くてこそ農村の使命と都會の使命とが各々人生のためとなります、今の都會の文明を呪咀するものがありますが、これはさうすべきものではありません。先づ早く農村文明を打立つることを爲ねばなりませんのであります。

前段にだんゝ述べ來つたやうに、第一に土地の絶對安全を施設することが必要であるが、此絶對安全といふことは人爲のものであるから到底天然力に打勝つことは出來まい、そこでころばぬ先きの杖として、またころんだときの起き反へるたよ^りとして保險の必要がある、此二者が相並んで農村及其土地の上に完全に打立てられ其効果を擧ぐるやうになつたとして、さてそれだけではすまない、農業者及農村が其職業乃至使命を果すべき色々の工作物乃至設備がまた其處に無くては仕様がな^い、道路交通の完全、衛生保健の完備、住家の建立、給水の安全、其他何々既に述

べた如くである、不可抗力の災害から免かれ不可抗力に襲はれて人力で打勝つことが出来なかつた場合は、保険施設によつて其災難から資産に代はるものを手に入れ、そして一方進んで其の資産を實用する所の手腕技倆をかねく具備するやう、農村及農業者に適當せる教育的造營物及其效用を常に發揚せしめなくてはならぬ、その如何なる學校の種類及學科を授業すべきやも既に述べた。そして一方に於ては斯かる農村に於て農業者が有する所の農場の規模は如何に之をすべきか、在來の五段百姓では到底駄めだ、少くとも四五町乃至十町歩位は耕作面積をもたねばならぬ、併し此耕作面積は其土地の利用種類即ち地目により又其利用程度によつて一定するものではない、これは一々具體的の場合で定むべきものである。先づ相當の規模の農場を備へてそうしてかねく鍛上げた農業的手腕と知識を實現する段になる、之を實現するには固より農場者各自の爲すのであるが、今日の産業は獨り商工業のみでは無い、殊に農業は共同的働作を要する、此點は世人殊に農村に在るものが知

らずに居る、燈臺下暗らしとは此事の如きを謂ふのだ、自然を友とし人を相手としな
いから、商工業とは違つて人事と没交渉の様ではある、成程或る仕事に就てはそう
だ、即ち作物をつくるのは自然の爲す所を補ふに過ぎぬ、其點に於て商工とは全く
異なる、但作物を作る材料の供給乃至農産物を販賣する段になると商業等と同じく
最も人を相手とせねばならぬ、材料の値段が高いか安いかわ、どの位の程度を以て相
當の値段とするか、どこへ持つてゆけば最も安く買入るゝことが出来るか、最も高
く賣却することが出来るか、どこからはどの位の労働能力のある勞力者を雇入るゝ
ことが出来るか、等の事項は之れは農業ではない、純粹の商業であつて、人を相手
とせねばならぬこの人を相手とすると單獨の考を以て固より完全に之を處理するこ
とが出来るとはあるが、凡ての人が、また凡ての場合に、地方到る處の人が之を
皆が皆まで考へ處理するといふことは望むことは出来ない、それが證據に同じ農場
もとより多少は種々の點に於て異なるところがあるとしても大體同じ性質程度の農

業者が甲は榮え乙は否らざるはどういふわけであるか、それそこに生きた證據が横はつてゐる、そこで多くの人は單獨で生産の材料及其成果を處理するよりは共同の力を應用するを凡ての場合に於て勝れりとする。

斯かる單獨の處理を爲さず共同力によるのは之を他の語にていへば、組合の利用乃至應用である、此利用と應用といふことによつて農業は成立つてゐる。農學其者亦理化學博物學等の利用並應用に關する學理の集まりだ農業固よりそれに過ぎない、農業の生産は理化學の知識の生む所であるが、之を成る丈材料を餘計使用せず而かも其産物を多く生産する段の仕事は經濟が技術をよく支配してこそ顯はるゝのだ、此組合は此經濟的技術を甘く運用する衆知の作用をなすものだ、農業用の資金は利が安くて年賦なくづし的の金錢であるべきだ、斯かる金錢は信用組合が貸してくれる、抵當となるべき不動産があれば府縣農工銀行、日本勸業銀行亦斯かる資金を融通してくれる、これは資金を組合によつて拵へることであるが、其他原料の買

入れには購買組合あり、生産物の販賣には販賣組合がある、若し家屋を建てたい、機械を使用したい、動力を運用したい、こゝにいふ必要あるときは生産組合が此目的に役立つ、組合的農業の經營と之を名づける、組合的農業經營は今日の農業法として最も賢明なる進取的方法だ。

ところが地方により人により組合的農業組合の何たるやを知らぬ、又知つても之を必要とせぬ様に考ふるものがある、これは農學などをやつた教育を受けた農村人等にあつて往々見聞する所である、これは固とより斯かる人々の境遇によるものであるが、組合は人々相依て立つことを主義とするものであるから、獨りよがり自己本位利慾主義とは兩立することは出来ぬ、そこで獨りよがり、自己本位、利慾主義のやからは多くは共同働作を排斥したがる、そゝいふ思想乃至習慣の横行する地方では、組合の共同精神はなか／＼行はれない、従つて其精神を理解することが出来ない、理解しないから組合を排する、組合を排する位だから組合を理解することが

到底出来ない、二者原因が結果となり結果が原因となつて形式的には組合が存立しても、尙組合の眞の精神の發揮せぬといふことになる。斯かる村落は我邦には處々にある、これは實に農村厚生のためにより敷問題である。どこまでも正さねばならぬ、そうせぬ限り農村の厚生は眞に成立せぬ。

農村に住む商業者であつて此組合の精神を體得せぬ例は幾等もある、彼等は組合といふものは自己のためのものである、自己の屬する組合は同業者の販賣する物品の値段を維持するを目的とするものだ、こんな考でなるべく組合の販賣品の値段を元價が下つても下げぬ、上がれば直ぐにあげる、こゝういふ得手勝手なまねをしたがる否現にしてゐる、組合といふものはさういふ利己的のものではない、却て利他的なもので、それが組合の精神だ、然るに實際はこれがあべこべに利用されてる現状だ、實は組合の精神は我邦では古來あつたのだ、唯併しそれは組合員のためといふよりは寧ろお上のための組合であつた、納税團體であつた、組合員監視團體であつ

たこれは徳川時代の五人組の制度は最も其の證據だ、五人組の制度は明治維新前後まで或る地方では行はれてゐたが段々と亡びて、さうして五人組に代はるべき制度が一時絶えたのであつた、今日こそ種々の制度があるが一時に何もかもメチャクの時代があつたのだ、神も佛もゴチャクチャとなつた時代があつた、斯かる時にはツマリ神も佛も一時影を潜めたものと見ねばならぬ。今日でも其證據は各地にあるだらう、五人組の眞の精神もそれで何時の間にか亡びて今日の産業組合の眞の精神もよく理解することが出来ぬといふ有様だ、同業組合は産業組合とは違ふが組合員が同業者相打つて一團となつて世間のためになるといふ精神は、唯其事柄が産業組合と違ふばかりで精神、共同一致世の爲めになるといふ精神には毫も違ひはない、人のために世の中に居るのだといふこと、此人のためにすることは何も隣人相對する處世上の事ばかりではない、農業をやる場合にも亦さうだ、同じであるといふことが人々に徹底しさえすれば、獨りよがりや、自己本位乃至利慾主義は廢たるのだ、

農村の居住者には商業者であつても、農業者であつても、地主であつても、小作人であつても、労働者であつても、雇入であつてもどうも此獨りよがり自己本位に囚はれる事實は先づ之を指摘して後其の矯正に移りたい。このことは次に述べます。

農業及農村の孤立は由來我が農業及農民の特徴の一であつた、今でもまださうである、それは農村と都會、之を他の語ていへば、米穀の生産者と消費者が何も没交渉であるとの意義ではないのであります、米は都會に賣れ、都の生産物は田舎に賣れてる、どこが孤立であらうか、といはるゝであらう。茲に孤立との意義は之を経済上いふならば農業用の資本は農業的のものでなくてはならぬそれが農業用資本に商業用資本を以てしてゐる、これが経済上農業の孤立してゐるといふ意義でありませ、今日農業用資本の供給機關として勸銀あり農工あり、信用組合あるとしても、尙孤立から全く免かれてはゐない、全く孤立から免かることが出來た、といふ曉さには、不動産の動産化が遙かに完全に打立てられた後でなけりやならぬ、例へば、

地券制度の復活のやうなことがあつて、今日のやうに農業者が資本入用のときに、登記などいふ繁雜無意味な手続きのため數日乃至數十日をくだらなく要するといふ事實がなくなつた後であります、若し今日地券制度の復活成らば、土地の價格は忽然として上騰するであらう、さうして農業の資金は裕に農業者の所要を充たして、餘りあるであらう、忽然として農業の生産資本の活動は十分に働らさかけて農村及農業の活氣は燃え立つてあらう、これは餘りに言過ぎかも知れぬが、今日の農村の資本缺乏は甚だしい、最近大藏省の調査だといふ全國銀行の大正十年末現在地所並に建物擔保貸出總額は特殊銀行六億八千二百二十萬九千圓普通銀行七億二千七百三十七萬四千圓貯蓄銀行三億五千四百八萬九千圓合計十七億六千三百六十七萬二千圓であつて、その中普通銀行の貸出は特殊銀行の上位にあり、且つ總額の四割一分強を占めて居る、實に普通銀行の貸出總計は六十三億二百八十九萬九千圓であるに地所並に建物擔保貸出は前述の如く約一割一分に過ぎぬことが分ります、此の様な貸

出の有様では到底農村資金の需要を充たすものとは言へない。斯く資金の需要があつて、その融通を得ることは出来ずに、出来たとしたところで、利率は高く返済期日は短かいといふ事實は、盡く農村及農業の經濟が孤立してるといふことを語るものであります。

それでありますから農村の振興を計かるには農村資金の融通を農村乃至農業的にはかる所の機關を充分に建設することが必要である、資金の出所成つて而して之を働からかすには、前に述べた所謂農業の組合的經營によらねばならぬ、これが肝要であります、農業の組合的經營の例を云ふと、例へば、今日では農村の生産物は各地區々に出荷されてゐるが、之れが一朝出荷組合によつて、爲されることになれば、自然と生産品の品質は統一されるのみならず、中間商人の介在のためをがれる所の損を回復することも出来る、此出荷組合に對しては消費者側に於ける荷受組合も自然と出来る筈である、然しながら出荷組合は其性質として成るべく小區域に極限せ

らるべきを以て、之を全国的にみるときは、地理的乃至時間的關係をよく考慮して需給關係を調節することはどうかといふと、旨く行かないといひたい、實際之を旨く調節するがためには、今日系統農會が行つてゐる、例へば、道府縣農會聯合農産物販賣幹旋所の如きものを要する、これは現に門司、大阪、東京、神戸、横濱の五箇所にあるそうだが、そうして其成績もかなりよいのであります、その外組合經營の利益の例證としては、材料を買入るにも、賣拂ふにも資金を借入るゝにも、機械乃至家屋を使用するのも大變便利があつて、小農であつても組合へば大農のやうな利益を體得することが出来る、そういふことは、今日農業者の皆々知つてゐらるゝ如くである。

農業の組合的經營の意義及び成績は各地に實例があることであるから、農業者は皆よく知つてゐるといふものの、實際果してそうであるか、それは組合の數も夥敷あるからといふ事實だけではあてにならないのであります、數よりも頭であります

す、頭がよく組合を呑込めば、自然に組合の眞の精神は發顯することになります、本統をいへば、組合の指導者ばかりでは行かない、組合員自身が皆んなよく組合の精神をよく呑込んで居らねば、組合の眞の精神を成績に顯はすことは出来ぬ筈である、組合の精神は組合員は誰れも彼も働らく手を束ねて居らぬといふことで、これが實際になれば、即ち共働といふことが成立つわけであり、共同は共働であつて誰れも彼も同じことを爲る、同じく働らくのである、産業組合といふ字はこれは組合にはあてはまらぬ、あれは共同組合、協同組合といふ字でなくてはならぬのであります、それが我邦ではコオペレーションといふ意義を顯はさぬ産業といふ字になつてゐる、これは此字を共同組合につけた人の失策であつた、世界何處へ行つても共同に産業を充てたところはありませんが、何故我邦で共同組合に産業組合といふ字をあてたかと推してみると、これは我邦では産業といふことが怠られてゐるか、此産業をはやらせる、今日でいへば、宣傳のために産業組合といふ字をつけた

のであらう、これは當推量てはありますが、當らずといつても遠からずであります。

兎に角農村厚生問題としては先づ、農村及農業の根基として據て立つ所の地盤乃至土壤の不可抗力よりの絶對安全が成立せねばならぬ、此不可抗力よりの絶對的安全は人工で出来るかどうか、我邦は地震國である、大正十二年九月一日の位の地震ならば之に對する策は出来る筈であります、又あの程度の地震の體驗は皆々得てゐるから、安心することが出来る、併し地震のことであるから、いつ何時、あれ以上の程度のもがお見舞ひ申すかも計り難いのであります、そこでいつ何時でも不可抗力からの地盤乃至土壤の絶對的安全は人工的には出来ぬとみることにあります、そこで第二のさういふ場合に於ける物質的損害乃至破壊に對する補充策をせねばなりません、これ農業保險の施設であります、農業保險以外に種々の保險があります、生命保險だの、火災保險だの、傷害保險だの、疾病保險だのがそれであり、

併し農業保険以外の保険制度は今日既に打建られてゐて可なり其成績を呈してゐるのであります、然るに農業保険は重大の必要あるにも係はず、此農業に對する諸種の天然的災害の多き日本國に限りて殆ど無いといふことは何たる矛盾した話してありませんか、それが出来ぬならともかく、出来ぬのではない、唯難いといふだけであります、或は財政の缺乏といふことを以てするかも知れませんが、何が財政の缺乏であるか、財政は立てやうでどうにもなりません、これは問題になりません。他の無駄のことを節約して農業保険制度に充當すれば、それですぐ濟むはなしであります、一旦成さんとすれば成る、これが人間のえらい力であります、此力を皆んなが出すことに仕度い、これは農村の人達が力を合はすればよい、そうして其力の合はさつたところは即ち實行である。

農村厚生問題といふ題をつけて、陳腐な所論をしましたが、陳腐でも實は新らしい、人が之を唱へねば唱へる人は新らしいことをいふ譯であります、そうしてひつくりかいたし、ひつくり返して、重々反復するのは尙更之を新らしくするのであります、その事柄が實行されて成績を挙げ世間を救ふことが出来るまでは、何度でも之を繰返す心懸けは肝要であつて、温故知新、私は農村厚生問題は今日我農村を生かす所の最も新らしい、又極めて肝要な根本問題であるといひます。

農村厚生問題の中心は、農村の生活の改善と、農村の生産力の増進にある。

農村の生活の改善は、農村の生産力の増進を以てして初めて可能である。

農村の生産力の増進は、農村の生活の改善を以てして初めて可能である。

農村の生活の改善は、農村の生産力の増進を以てして初めて可能である。

農村の生産力の増進は、農村の生活の改善を以てして初めて可能である。

農村の生活の改善は、農村の生産力の増進を以てして初めて可能である。

農村の生産力の増進は、農村の生活の改善を以てして初めて可能である。

農村の生活の改善は、農村の生産力の増進を以てして初めて可能である。

農村厚生問題

農村の生活の改善は、農村の生産力の増進を以てして初めて可能である。

農村の生産力の増進は、農村の生活の改善を以てして初めて可能である。

二、農業と日本の國民性

農業と日本の國民性

一 自然界より人爲界へ

農業より見たる國民性の研究には、先づ農業は人によりて立たず、自然によりて立つものであることから始まらなければならぬ。ブレンタノがいふた如く、人間は衣食の慾、性慾、被認識慾の順序にて生くるにあらずとするも、何といふても衣食なくては生くること出來ず、此點から農業がどの國でも、その國民性に尠なからざる影響を與ふるものであるといふことはいふまでもない、但し尠なからずといふその程度が國によりて亦餘程異なる所があるのである。日本としては其影響が各種の方面に涉りて牢乎として抜くべからざるものがある。私は現時の日本國民性は農業的であつて他のものでないといひたい、之を他の語にていへば自然的であるといふのである、之れは人爲に對する自然の意義であつて、生粹である、初生である。

吾々は作の出来ないのではない、まだ作物を作つたことのない土壤を、バーヂンソイルといふがその意義のバーヂンである。然るに此の處女然たる日本の國民性も近來は大にアバズレて來た、これは世界大戰の實物教育の生む所であつて、好むとも好まぬとも仕方がない、來るものが來たのであつて、誰もかもヂタバタせず、其運命を受け入れねばなるまい、解放も非解放もあつたものではないのである。然れば農業より見たる日本國民性は、大ザツバに前後二大時期に分けて之を研究せねばならぬ。然しながら日本國民性が自然界を抜けて人爲界に入つたのはまだ早々のことであり、これから後に其の本來の性状を鑄型せらるゝのであるから、今より之を彼是論ずるのは尙早たるを免れぬと思ふ。依て自然時期に於ける農業より見たる日本の國民性を概述せんと思ふ。

二 農耕の起原

ポツクル黨やメチニコッフやが論ぜるまでもなく、自然的環境が、その誤まるこ

となき影響を人類に賦與したこと乃至分賦することは大河と（エ・ル・グラント・フリユーブ、ヒストリク）文明の關係にみても又一國の動植物界と國民建設の關係にみても之を疑ふわけにゆかぬ。但其範圍と程度に就て異論あるのみである。誰れも物理的史觀論者のいふが如く、文明の進歩は悉く其處に起因するとは思はなからうが、之に反してマルクス、エンゲルスの唯物史觀は遙かに吾人を領かせること、今日に於ては、之に若くものはないやうに思ふ、農耕の起原が單に自然の模倣に出て、養畜の起原が單に迷信に出でて居ることはグラント・アレヤやハーンの言ふ所の如くであらう。してみれば、初めは自然をまねるのみで農耕は出來たもので、其後自然より與へられたる諸種の資料に事缺くに至つて、之を節用する所の經濟的觀念を生じ、從て此觀念を實現する所の諸種の生産技術乃至經濟技術の隨伴せるものである。

然るに、我日本に於ては、一小島國たるに拘はらず、自然の恩惠は至大であつて、

近來まで優に食糧を生むに差支なかつた。差支はあつたかは知らぬが獨り陸上産物のみならず、四面環海であつたので、魚肉類の食料の豊富といふことが、さう甚しく經濟技術の切要を感じしめなかつたのであらう。況して徳川三百年の太平と鎖國は、足らぬ勝であつても武士はひもじいなどいつては罷り相成らぬとあつて、無理にも自ら抑へ付ねばならぬのであつた。更に加之、國民の大多數は乾物の如く死んでるのか生きてるのか分らぬ次第のものであつたので、食糧の不足をいうてお上から目玉を頂戴せぬのはヤット明治維新以來のことである。

今であればこそ、國民の大多數が米不賣同盟をやつても差支ないことゝなつてゐるが、維新前は百姓はお豆腐を買ふにもお上の承認を要するものであつた。コンナことは今いつでも誰れも本統にせぬであらう。尤も記述者も實際目撃した譯でもない、併しそれは本統であつた。そんなに政府からは抑へ付けられて居つたけれども、日本を背負て立つものは所謂お百姓であつたことはいふまでもない。當時の學者は

固より、賢君名相は皆百姓を尊重し、之を口に筆に上げせたのであつた。又實際之を政治の上にも顯はしたものである。それ故、お百姓の社會及政治上に於ける潛勢力は今日に及んで居る、これ徳川政治の綾のある所であつて、頗る妙とする所である。人として自惚と何とかの無いものはないと云ふ其自惚れは今日無辜なる國民性として海外に顯はれてる、農業を以て海外に立つことである。日本人の海外に知らるるはその娘子軍と海外農業者ではないか。腕一本體一つあれば、世界到る所にて身を立てんとする。これが鎖國時代の抑壓政治の下に在つて、暗々裡に養はれた自然的所産であらねばならぬ。商業を以て立つは彼等の國民性とまでは成つて居らぬ、農業的植民は日本の國民性であるといはねばならぬ。

三 農作の豊凶と投機心

農を業とするものは作物を作ることのみを知つて、之を賣ることを知らぬものである。賣ることを知らぬといふは、賣買の本統の術を暗らんぜぬといふ意義であ

る。之を他の語にていへば、日本人は農工の民であつて、商の民でないといふ、これが日本の國民性である。

一體商業の極致は投機である、殊に今日に於てさうである。勿論日本人も投機を中々やるにはやるがその投機は所謂お天氣師の投機である。眞のスペキュレーシヨンではない。是れがまた日本の國民性であるやうである。その由來は農業が基である。日本の農業ほど不安心のものはない。そは近く米價の變動の甚しき事實が最も雄辯に之を證明する。實に日本の農民は天候によりて日々生命を動かされて居る、中には、今日では學問の力にて天候を左右し得るものもあり、又實際之をやつても居るが、大抵のものは蟲害、之は野菜につきものだ。果實の病害、之も付き物だとして居て、テンデ頭に置かない、凡て運は天に任してある。而かも相當に作物のとれるのは風土のよき故であつて、歐米にはないことであつた。それ丈投機心に浸潤されてるのである。

尤も徳川時代に於て花札及類似のかけごとの流行は、社會上下一般に行はれ、神社佛閣の祭禮にも公けに内々に大目にされてゐたのである。それが相場の由來であるかの様にいふものもあるが、それは實は既に第二次の原因であつて。其もとは天候の變り易く從て農業の生産の豊凶常なきよりきたものであるといはねばならぬ、日本の天候の變り易きは、斯の如く日本の農産の豊凶の無常を招き、從つて日本の國民性として投機心を誘發助長せしめたものであるが、併しながら天候の變り易く溫暖濕潤なるは相對關係に出で、之れがため地中養分の風化作用を盛ならしめ以て、日本農業の生産豊富を天下に雙びなからしむる所以であつて、強がら哀しむどころか却て望まねばならぬ、人間萬事塞翁が馬、イヤ自然界のこともまたその様なものである。若し日本の天候にして變り易からねば到底此無數の人口を此小島で養ふことは出来ぬ。餘り過不足なくて養ふことの出来るは始終變り易く、從つて投機心を誘導助長せしめた日本天候のお蔭ではあるまいか、天道様に向つては餘り口は

つたいことは言へぬのである。

四 日本農業の特徴

日本農業の豊凶恒なきは、日本の國民性として何事も投機、所謂一か八かを賭せしめた、併しながら之は單に天候の斯かる自然環境のみより生れ出でたのではない、當時食糧は過不足なく、優に人口を養ひ得たから別に經濟技術の必要なく、生産技術のみに腐心して生産販賣組織に心を傾けずとも濟んだのに依るのである。此弊は今日に於ても尙我日本上下一般に付き纏つて居るのであるが、その總體の販賣組織に心を傾けぬのは、生産が豊富であつて生活の困難を來さぬ故もあつたのであらうが、併し翻て之をみれば營利は生産が豊富であつてもなくとも、又豊富であればあるほど起る筈のものであるのに、さうでなかつたのは、畢竟農業が日本國民性に賦與した、物を作る民であつて商賣の民でないからである。全體商賣は人を悪くする筈のものではない、却て實質に人をセントルマンライキにするものであるこ

と、英國國民の商賣に之を見るが如きものであらねばならぬのに、我邦では商人同志の間に在つて「旨くやつた」といふて相互に他の不注意に乗じて所謂儲け仕事をしたのを相慶するといふは、眞に商賣の何たるを解せぬのである。そして、その眞に商賣の何たるを解せぬのは、天候によつて相場をする思想及情緒が日本國民性となつて居る故である、而して其由來は既に述べたやうに、日本農業の特徴から出て居るのである。日本人は浮かれ易い、悪くいへば輕卒であり、革命などに乗り易い、電車の燒打などに荷擔し易い、煽動政治家の乗じ易き性分あること佛國民のやうであるといふも矢張り農業が與かつた國民性であり、もとは一であつて其分派に過ぎぬ、私は佛國國民性に就ていふものではないが、その國民性が日本國民性に似通ひたる點のあるのも小農制の故であつてその農制は風土よりの關係の影響のあることを考へる。アース・ヨングをして嘆息せしめた、礫土をも黄金化する佛國の自作小農制は一面佛國土壤の自然之を然らしめたのであつて、若しそれが獨逸のやうに瘠

土であつたならば、決して櫻花に浮くやうな國民性を贏ち得ずしてモット重々しい動かない、組織的な國民性を賦與したであらう。そして大農制を生ずるに至つたであらう。勿論人口並に法制等の關係が茲に交渉するを蔑しはしないが、大體に於て爾か思はざるを得ぬのである。

五 愛郷心

斯くては餘りにポツクル黨のやうであるが、併し何といつても農業は生産の事でもあれば國家の由來するところでもあり、自然の環境に接するもの何としても農業の影響を免かることは出来ぬ。我が日本にて徳川時代の所謂町人が大名を金錢の力によりて左右する時代になつて以來、農業の自然的環境に對して經濟的社會的環境も生出し初めた、そして遂には今日の如く社會的境遇の人生に對する努力を大に認めなくてはならぬやうになつたが、實は今の處は時ならぬ氣候がきて早芽が萌出た觀もあるのであるが、併しながら其後天候があと返りもせずして、幸か不幸か芽生

に適順であるから、これから從來の農業的自然的環境の生み出せる、そして殆ど固定せる我國民性も今度は人爲的社會的經濟的環境の鑄型に容れらるゝであらう。これからは日本國民性もその農業的生産の臭味より脱して、商業的人爲的生産の臭氣を帯びなくてはならぬ。そは善惡の問題にあらずして必らずさうなるといふ必然の問題である。併しそれは後々の話で、今は農業より見たる日本國民性としては、外國に出張つて農業によつて金を儲けて錦を着て故郷に歸らうといふ郷土心、それは既に述べたやうに日本に固有せる國民性であつて農業に由來するものである。それはよくいへば、一種の愛國心であつて、甚だ尊ぶべきものには相違あるまいが、わらくみれば頗るしみられた、ひつこみ思案であつて斯かる小さな心では日本民族はとも世界に乗りでる望みはかけられぬ。更に之をみれば、日本國民性として外國化せぬことも亦農業に由來するものであつて、アメリカにて相應に成功せる農業者がアメリカ化せぬために排斥せらるゝ所以である。この外國化せぬことは一面よりみれ

ば前述の郷土心と因果的の關係もあらうが去りとして外國化せぬからとて必らずしも錦を着て故郷に歸りたいからのせぬのみでもない、それは別々にみて差支あるまい、又一緒にみてもよろしいのであらう。

六 農と忠君愛國

農業より見たる日本國民性として、その愛郷心、之をよくいへば忠君愛國は日本國民が永く農業國民であつたのに基く。そして其農業國民であり得たのは、日本の國土がよく農業に適せるからであつた。農業に適せるといふのはそれだけでよく民心を安んずることが出来たからである。併しながら一方日本の國土がよく食糧を相當に産出してきて、民心を安からしめたのはその風土の變り易い故である。この風土の變り易い天候のため豊凶雷ならぬ國であつたことは、今も尙さうである。女心に、その移り易さを男心と秋の空と感傷的に詠ましめたうたであるが、之を平俗にすれば、忌々しい所謂相場心を日本國民全般に扶植せしめた所以であるやうだ。相

場師というて世間一般に之をいやしむが、其實は之を試みたくなくもない、成金を賤みて而して之を夢みることなきにあらずといふやうな人心は、我日本國民性として、どうもあるやうだ。イヤ農業よりみてある筈である。あるのが當然である。此の相場心は常に都會のみではない、相場は所謂米屋町を聯想せしむるが、實は米屋町は日本全國到る所これあるのであつた。其具體的シムボルは最近の株熱がその最も適切な例證であらう。相場心は一方に於ては錦を着て故郷にみせびらかすといふ被認識慾にも當るのであつて、そして、此郷土心は亦外國化せぬ所以である。併しながら、これが英國人であれば決して故郷にみせびらかさない、植民地に新たにスイトホームを作つて、溜め金を故郷に持ち歸らずそこに死する覺悟をする所である。元來愛國心も國家と社會と大體合一したる當時、一民族の協力を内容とする感情に過ぎぬのとは異なつて、近來は國家てふ地理的組織の外に教會、組合、學會などのやうな機能的組織の發生もできる世となり、國際の社會的となれる今日にては、

國家は一面其國民の個性の保護を目的として、民族的自治をなすと同時に、他面國
際的組織を保障し、各民族を發達せしめなくてはならぬというやうに、新しい觀念
を生ずるに至つたのであるから、日本國民の愛郷心、相場心、外國化せぬ心も早晚
變動を受けることであらう。受けるであらうては無い受けねば國も立ちゆくまい。
併しそれは農業の自然的時期のとは無い、農業の人為的時期に入つての後のとて
なくてはならぬ、さうしてそれは己に來りつゝあるとは既にいうたところである。

七 農業より出た依頼心

農業より見たる日本國民性として郷土心、投機心、外國化せぬことを擧げたが、
日本國民性の依頼心も農業より出で居る。依頼心といふのは何事でもお上のするこ
とはご無理ご尤もで閉口頓首、いふべきをいはず、權利を主張せねば義務も守らぬ
ことである。何事にも政府におたのみ申すことである。これは農業が自然一天張り
てきて居るのに妥當するのである。これは一面よりみれば、洵に良風美俗であつ

て、これも徳川政府の最も力こめて涵養せるものであつて、それが習ひ性となつて
大正の今、尙官尊民卑、事大思想に捉らはるゝ所以である。良風美俗は今尙常識上
尊重する所であつて、ナニも之をケナスに當らぬが、餘り良風美俗に拘泥すると、
疑ては思案にあたはぬて、それぞれの弊害が我國民性に顯はれてゐるのは誰れしも知
る所であらう。官僚式といへば人の苦笑する所である、今日は官僚自ら之をいふ位
であつて、相警むる所である。併しながら、これは農業に在つては、今尙天然に依
頼することが、最も經濟的農業であるのである。若し最も利益ある農業はといへば、
沃土に農業を經營することである。瘠土に農業を營まば骨折損のくたびれ儲けに終
らねば幸である。それ故に、農業そのものにあつては依頼心は今尙全く捨てること
は出來ぬのみならず、大に之を尊重せねばならぬ。併し、自然以外に依頼すること
は農業に在つても間違である。況んや其他の業務に於てをやであつて、若し餘り官
にのみ依頼することが我邦の農業者のやうであるならば、到底我が農業は立ちゆか

ぬことは明かである。近來農業者自ら立つて米の不賣同盟などをやつたのは、事の善悪は別問題として大に望むべきことである。私は日本國民性として徒らに他に頼みて自ら恃まぬは、既にその御本尊たる農民及其黨與すら自ら之を打切るやうであるから將來は日本國民性としての依頼心は早晩なくなるべき筈であると思つて、今から之を祝福して置かう。併しながら、斯かる依頼心なき時代になるは、農業が自然時期には勿論發現する筈はない。矢張りその人爲的時期に入つた後のことたるは言ふを俟たぬ。

八 民族性の外國化問題

日本國民性として外國化せぬことは、甚だ尊ぶべきことのやうであるが、その米國に於て排斥せらるゝ所以であるのをみれば、餘り贅めた話ではない。それはその筈世間並みにならねばお互同志の間に在りても排斥するは當然なのである。去れば差支なき限り、吾々は成るべく外國化せねばならぬ。併し外國化するといふたと

て、何も外國の惡習慣を學ぶには當らぬ。所が、此習慣の善惡、便否は其所にあつて善が惡となり、便が不便となるものであつて、必ずしも良風美俗いつまでも良風美俗にあらず、不便な習慣と定まつたものではない。コムバートメント住むは之に住みたることなき人達には不便であらうが、住み慣れた人達は、大に之を便利とし、これでなければビジネス・ライキでないと言ふ位となつた。これは實際丸の内の三菱村の住人皆同感であるとのことである。日本國民性の外國化せぬことも早晩持たへ切れまい、既に其徴候は觀面に現はれてる、農村でさへ不賣同盟の如き餘り人聞きのよくないことを表立つてやつたのではないか。ナゼやつたかといへば、唯物史觀は直に之を解釋して餘りあるのである。外國化といふことは語弊がある。世間並になるまでのことである。

農業よりみたる日本國民性の研究をすればするほど、從來吾々の尊重せる日本國民性も甚だ影薄くなつたことを覺えずには居られない。影薄しなどと云へば之を慨

くやうにも聞えるが、實は慨いたところが始まるまい。來るものは來り去るものは去るに定まつて居るから、何をクヨク川ばた柳、浮くのが當世向きではないか。農業の人爲的時期に向ふこと甚しきものがあるは、その當世向きである證據、到る所の農村に於て蠶を養ひ絲を引くのはそれである。これアメリカと直接によりつもたれつする所以である。アメリカが生絲を買はねば日本農民は困る、商人は困る、國家がこまる。八八艦隊が出來ても重油は數日間航走するだけしかない、さりと甚だ心細い話し。食糧の獨立、軍器の獨立、石油の獨立、何もかも獨立せねばイカぬ、それには農業の發達が第一、イギリスの如き今更之を認めて努力日も尙足らぬといふはなしである。

農業と日本の國民性よりみて、農業の尊重は去ることながら、農業の尊重を實にすればとて、農業が所謂自然時期を去ることを遅くすることは出來まい、却つてその人爲時代に入るのを早くするに過ぎぬであらう。之がため日本國民性も變動する

に違ひない。その變動はよくもあしくも仕方がないのであつてゆく所にゆくのである。さう心配するに當らぬと思ふ。早いはなしが農業より見たる日本國民性の一たるあの相場心の如きも、農業が自然時期より人爲的時期に入つた後には、却つてお天氣相場はなくなつて、眞の科學的投機になるだらうと思はれる。或は相場は全然跡を絶つやうになるかも知れない。それは農村に就ては殊に明かにいひ得るのである。例へば豆粕の如き、今日では農民みな相場をして居る。その相場といふのは先きが安くなるだらうというて、施用期節になるまで買入れぬだけのことであるが、それが矢張り彼等の相場である。期節になれば誰れも彼も買入れねばならぬから、皆の衆が一時に買出す、定期が上がる、上がつても品物が間に合はぬ、商人に旨くやられるといふ段取になる。毎年此例を踏襲して、いつも其弊害を受けてゐても矢張り同じ傳でやられる。それが農村の所謂相場である。そして此相場が同じやうに都會の米屋町にも流行するのである。眞の相場術そのものは我市場には見られな

い。大雑駁な非科學的なも天氣次第でどうでもなるといふ占なひのやうなものに過ぎない。ところが、農業の人爲時期に這入れれば、萬事が組織的で經濟的で社會的に聯絡統一をはかることが出来る故、生産者と消費者との間に無用の中間者を要しない、従つて其間に所謂相場を試むる餘地を與へない、チャンスなからしむるであらう。チャンスなくば相場を試みんとするもチャンチャラをかしい。今はチャンスだらけであるから、無智無識のものも、人並にお天氣を張るのである。そのチャンスなき組織が行はるゝ時代とならば、今日の所謂も天氣的相場はなくなる筈である。斯かる時代となれば、日本國民性も餘程摯實となり、組織的となるであらう。何にして國民の六七分を占むる農村の居住者がその環境よりの影響によつて一變化を受くる次第故、全體の國民性も動かずに濟まない譯合である。左すれば、今時の日本國民性が其安定より搖がされるのは左程心配にはならぬ。而して或る意味に於て相慶すべきことであらう。

九 人爲時期の農業

農業より見たる日本國民性として郷土心、相場心、外國化せぬこと、依頼心を擧げて其弊を述べたが、尊農の立場より之をみれば、此等國民性は愛國心、商業心、獨立心、秩序心の名を以て、苟も日本國民としては皆それ〴〵尊重すべき性狀であつて、尊農論者は大に之を稱揚進展すべきを叫んで居る。成る程も尤で、此等國民性の一層の固定を望むが、但併し、望んで容易に得られないことだけは心得ねばならぬ。それは農業は自然に立ち、人によりて立たずに濟んでこられた、所謂自然時期に在る間こそ、それは望みて得らるべき筈のもので、これが人爲時期に入つたら最後、望む丈は人の自由である。望みても中々得られない筈になる。而して今は我が日本農業も人爲時期に入つたから、農業より見たる日本國民性もズツト其變易を見せるであらう。従て之れが研究をなすものも此推移乃至變態に宜しく心すべきであらう。

三、農村青年に與ふ

農村青年に與ふ

—

凡そ青年ほど純真なものはない、これは求めてさういふわけになつたのではなくて、世の塵埃にまみれぬからである、殊に青年の純真を求むるならば、農村のそれであらう、これは何といふても、彼等が大自然と日々親んで居るからである、嘗に大自然と親んでゐるのみではない、彼等の父兄の職とする所も亦自然を相手とする、人との競争をせぬでも自然と相親んでゆけば、いつかは收納のある業務であるからである、かくて日常親しむ所は、競争をしない而かも創意と自由とある世界である、競争といふことは別にわるいことではないが、競争のために人に勝たうとする、自分のそばにきたものにはツイ／＼思はず肱をつく張つて、邪魔をする、そして己れより遅れしむる、さういふことがありがちである、併しながらさういふいた

づらが競争に必らずつきものであるといふのではない、それは武士道の精神にかなつたやりかたであるのが當然であるが、平常ではさうでもない人であつてもイザとなると、右いふやうな意地悪が得て起るものである、これは人間の弱點であるのだ。それで此競争がないのが農業であるから、わるくならうと思つても、天から悪くならない、天が初めからそうしてくれたといふのは、ナント芽出度の事柄ではある。

人と争はんとするも、争ふことができぬ。これが農業に従ふ者の天から命ぜらるゝ所である、併しながら争ふといふことは悪むことではない、争ふには其道を以てすればよいのである、若し人此世にあつて人に負けてもかまはぬとしたら、どうであらう、世の中が進むであらうか、退くであらうか、これは人に聞かぬともわかる、天才であつたなら別に勉強せぬにしたところが、クラッスのヘッドとなることが出来るであらう、それは併し先づ取除けてあらう、一般には先づ人一倍勉強せぬ

ば、クラッスのヘッドは愚ろか、中には及第すら難しいものもあらう、それは亦例外とするも、勉強することは争ふことである、してみると世の中の進むは勉強するのである。そして其勉強するのは争ふのである、此争ふ心がないと夫はゆる／＼と行かうといふ段取になる筈である、此除行といふことは間違を生ぜぬ安全な遣り方である、急がば廻れといふ、成る程廻るに限ぎる、併し又一方よりみれば人生僅か五六十、成るべく急がずばならぬ、これも亦無理ならぬことであらう、飛行機でなければ、間に合はぬ、それでなくば少なくとも自動車は必要である、現にアメリカでは自動車を持たぬ農業者はないのである、農業の種類にも自動車農業といふ一分類を立るに至つたほどである、それほど仕事は急がねばならぬ、能率を上げること、に勉強ねばならぬのだ、争はぬといふことは事業の進歩發達を止めるのである、止めることはあるまいが少なくとも之を遅く緩かならしむるはいふを俟たぬ。

争はぬ、従つて勉強せぬといふことは、斯く事業の進歩を阻むものである、とこ

ろが此天然と親しみ、人と競争せぬといふことが、我が農業の天稟である、特徴である、これが芽出度といふは理窟にあはぬ、成る程そうだ、農業では先づ第一に之を極めるものは其土地である、地産力の劣つたところで農業をやるのは、儲かりつこはない、動もすれば損もすることになる、農業で一番利益を挙げやうとすれば、其地方で一等地を選ぶに限ざる、若し二等地三等地といふ地産力の劣つた土地で農業を営めば損はせぬとも儲かりつこはない、これは甚だ面白くない、苟も資本と勞力とを投じて而かも損をする、イヤ儲けがない、こんな馬鹿なことはない、若かず都會にとびだして商業をやるべしである、こゝにいふ心持を起すものもあらう、そゝいふ勇猛心を起すは讚むともケナスには當らない、ぐづぐづして田舎に居るよりは、ひとり御當人のためのみではありますまい、大きくいへば國家社會の爲めともなるのである、斯く進取的でありたい、青年の諸君はなど申す迄もない、青年が進取的であるのは當然である、若し進取的でなかつたら、斯かる青年の多い社會は早晚亡

びるであらう、亡びる運命に在るものであらう、これは憂るには當らない、苟も青年である限りは皆進取的であるのだ、唯茲に心配に耐えぬのは、その勇猛心乃至は進取的氣象のいかに發揮せらるゝかに在る。

農業には競争はない。秘密はない、皆開放的である、誰でも彼でも、種子と鎌と鍬と肥料さへ持つて居れば仕事はできる、そして仕事をすれば秋の收納はあるのだ、これ斯業の特徴であつて、最も尊といふ所以である、誰れでも彼れでも食つてゆけるのである、ところが實際は喰つてゆけぬものが澤山ある、これは何たる間違つたことであらう、そんな筈はないのである、無い筈であるが在るとはどういふ譯であらう、どういふ譯も何もない、それは勉強せぬからだ、勉強の途を誤つてゐるのだと謂はねばなるまい、何が誤つてゐるのか、つゞめていへば斯業經營の方法が至らぬのである、斯業の經濟を誤まつてゐるのであると謂はねばなりません、そゝいふより仕方がない、つまり勉強せぬからである、人一倍斯業に熱心せぬからである

競争をせぬからである、進取的でないからである、競争のない、秘密のないのが農業である、それに競争せぬから、勉強せぬから喰つて行けぬといふのは、何たる辻褃の合はぬことだとそしらるゝであらう、これがまた無理が無いのである。

二

農業には競争がない、秘密がない、開放してある、が故に商業のやうに人に先んじなければならぬことはない、人をだますことも入らない、うそをいふにも當らない、全く無邪氣にやつて行ける、實際は或はそうではあるまい、農業にも材料の買入れ、生産物の賣拂ひもある、多少の商業思想は必要である、販賣術もなくてはならぬ、特に近頃の農業者は商業的思想と懸引とを缺いては旨く行ける筈はない、成る程そうである、併しながら農業其ものゝ根本に於て競争がなく、秘密がなく、複製がない、複製がない故に儲けが少ない、元來物の儲かるといふのはどういふ譯かといふと、凡て商工業は萬遍もなく複製をやるからである、レプロダクションは

動物の生れるのも、それである、人間もレプロダクションをやる、女の子はどこの女の子も女の子だ、男の子はどこの誰その子も男の子だ女が男であることはない、時には三ッ口もある、かためもある、びつこもある、が、男は男、女は女だ、これは誤まらぬ、併しながら女の女たる、男の男たる、それ〴〵異なつた女である、女も一樣ではない、美人もあれば醜婦もある、小町があれば累女もある、巴御前もあり板額もある、これは孰れも女であるが、其の女たることが異なつてゐる、個性が異なつてゐる、それでもレプロダクションには相違がない、ところが商工業品にあつて、何から何までも形體でも内容でも皆一樣であつて、毫しも違ふ所はない、これが本統の複製である、複製に複製を重ねることは何等の手数を要しない、數多く出来れば出来る程ほど安くなる、安くなるから儲かるのである、これが複製でなければ物の儲からぬ證據である、米なり麥なり豆なり大根なり、それ〴〵複製ではあるが、商工業品の複製とは異なる、同數の時間に同量の資本と勞力とを投ず

れば商工業品は同數量の均一な物品を製造するのである、農業にあつてさういふことが出来やうか、同じ耕作法と同じ肥料とをやつて今年は豊作である、昨年は頗ぶる凶作であつた、といふ譯合、複製は複製であるうが、儲からぬ複製である、儲からぬ複製とは、其間に何等かの個性が顯はれるのである、これが農業の自然を相手として競争がなく、秘密のないといふ所以である。

此の如きは之を名づければ所謂創意である、創作である、イニシエーチブである、イニシエーチブ是れ農業の生命である、都市の塵埃みなぎり、騒音囂々たる工場にあつては複製は出来るが、どうして創意はなかく生れるものではない、工場の工作では同一の設計によつて同一の製品が出来る、均一の製造、これ工場工作の特徴である、毫しも工作者の創意は認められぬ、若し工人の創意が許されるとなれば、直ちに工場工作を破壊することとなる、然るに農業にあつては凡ての作物に於て創意の流露せざるはない、創意があるから農業者の満足がある、こう造らうあ、造らう、

今年は一つ畦をこう作りませう、肥料を餘計やりませう、ア、したりコウしたりして、作物が出来る、遂に満足を來さずに、終つたとしてもそこに創意の多少の窺はれぬことはない、工場に於て如何なる場合にも創意の毫も無いとは同一ではないのである。*(此、位、農業者の創意は、商人工業業者と難を其機云)*

農業に競争はない、秘密はない、雨はどこでも降る時は降る、日は照る處は影ひなたなく照る、霜は降るときは降る、雹亦然り雷亦然りである、皆どこでも一樣である、これ自然との交渉であるからである、若し人との交渉であつたならば、どうであらう、彼人は嘘をいふ、彼奴は信用がない、少しおまけをつけておけ、現金でないから、高く賣らねばならぬ、こゝういふ人を相手としての交渉は農業にないといはれぬが、其生命ではない、農業は人とは没交渉である、此意義に於ては競争を要せぬ、秘密を要せぬ、といふのである、併しながら、雨が入らぬときに降る、降つては困るのに降る、早く日が照らねばならぬに曇天が続く、これでは到底作物は

*分あると
思ふ。
(一百姓)*

とれぬに決つてゐる、茲に於て農業者は之を手を拱ねて傍觀するか、天のすることであるから仕方がない、人力の如何ともすることの出來ぬ次第だ、といふて天然の爲すが儘に放任する、或はするものもあらふ、それは文明的農業者の爲さぬ所である、彼は斯かる際に處する合理的農術を會得せねばならぬ、會得して之を實地に施さねばならぬイヤ今日の學術を有する農業者は皆之を能くするのである。

茲に於て、競争のない、秘密のない農業に競争がなければならぬ、秘密もあるであらう、但し此競争乃至秘密は人にかくすことは出來ぬ、人と争ふものではない、天秘をあげき、天然と争ふのである、人と争ふのではない、人の秘をあげくのではない、此意義に於て競争のない、秘密のない農業に於て競争あり、秘密あるのである、競争は勉強である、秘密は堪能である、或は會得である、今日の農業者たる最も此意義に於て競争せねばならぬ、勉強せねばならぬ、裕々閑々、煙草をくゆらして日を暮らすは禁物である、況して體力腦力の充實飽滿せる農村青年諸君に於てをや

青年の九割は方途に此一徒然事ナリ
余は此等青年散花ノ名ヲ知ル

尤も、然り現今ノ農村

である、よろしく其得手であるところの創意を農場のそれ々の作物に加ふべきである、否加へねばならぬ、斯かる創意は教育の教ふる所であつて、補習教育より、實業教育、大學教育、それ々々その受けたる程度に依て其効果を顯はす筈であるが、扱實際に於て青年諸君はその創意を發揮し居るかどうか、これは一に其地方々々に就て觀察せねば真相を捕ふることは出來ぬであらう、但しかく望んで置くより外はなす。

三

農業には競争がない、忌むべき人との競争はない、若し競争があれば自然とのそれである、農業には秘密がない、若しあらばそれは自然の秘密である、此自然の秘密をあげくは農業の進歩であつて、天然を臣伏せしむるのである、自然との争ひであつて人との交渉ではない、人に勝つことは出來るが、天に勝つことは容易ではない、天に勝つと思ふのはそれは天をよけるのである、天をよけるのには創意を要す

る、これ古來の諸種の農業法乃至技術の存する所以である。

農業の創意は自由である、窮窟でない、人力に抑へられない、騒音の下、塵埃の中にあつて之を創意するのではない、青天上の下に在つて爲すの自由をもつてゐる、農業は天の時に依らねばならぬが、其依らねばならぬ時は春夏秋冬の四季、一季九十日間である、而かも九十日間も嚴然たる境界があるのではない、踰越すべからざる限度ではない、其自由は到底商工業の生産にあつては到底得べからざるものである、朝は七時より夕方まで働かねばならぬといふ人爲的規則はない、己れの創意の命ずる所に依て星を戴いて出て月を踏んで家に歸ることもよろしい、一切萬事拘束は農業にはない、人爲的の束縛は之を見ることは出來ない、森林帯の如く作物帯がある、作物帯がある如く經濟帯はある、富士山に登れば七八合目より偃松帯がある、これ一種の制限には違ひないが、天然の命である、人爲的のものではない、斯くいへば人爲的束縛乃至制限を以て悪しとするが如くであるが決してそういふ意

此ノ問題ハ
大イニ考案
スルハ要ガ
アリト思フ
労働時間
ノ長キヲ
ワケアルハ
然ラズ又
ヤリタリ
テナルテ
ハナク
仕ルニ
宜シ
ハレサ
カ
ラ
仕
方
ナ
ク
モ
ア
ル

義は毛頭ない、但人爲は或は缺陷なしとすべからず、此意義に於て契約はまた之を解

くことを要する、在來の道德習慣は或は今日の道德習慣ではない、昔時の良風美俗は或は今日の公益に合致するといふことが出來ぬ場合があるかも知れぬ、西洋人の風俗は日本人どうしても之を是認することの出來ぬことがあり、西洋人亦どうしても日本人の意のある所を知るに苦む場合もある、これ人意のなせる所であるからである、此間に破綻がある、不一致がある、鬭争がある。然るに自然にあつては到底斯かる破綻、不一致、鬭争あることを許さぬ、これ不自由なるが如くであつて、實は其の不自由は無窮であるから自由であるのである。

農業の自由、従つて農業者が農村にあつて農作に従事する自由は、自由なるが如くであつて、その時に縛らるるは不自由なるが如くであるが、實は自由此上なしてある、十時間の労働、八時間の労働、五時間の労働、人爲的に制限を受ける、それ以外は自己の自由である、甚だ自由なるが如くであるが、實はその十時間、八時間、

五時間の規定こそ甚だ壓抑的の甚しきのである、自由の意を解せざる甚しきものである、自由の不自由である、これは農業の不自由であつて自由であると好對照である。

命と現今ノ農
村離氏ノ大
半ハ自由年ニ
アリト見テ
又カロウニ
シテ其ノ自由
日標ノ大部ハ
アルテハナイ
カト自合ハ
見テ其ノ自由
物ノ自由ハ
ニ見テ其ノ自由

農業の無競争、農業の創意、農業の自由これ斯業の三大特徴である、これ斯業の尊とい生命である、此生命、此特徴あるに依て、農村の生命は持續せらるゝのである、今日農民の離村とやらの現象は獨り日本のみではない、世界到るところで見るところである、止めんと欲して止むることの出来ない社會現象である、そうして此一般的現象に依て農村の影はうすれゆくといふのである、成程そうである、然しながら、この農民離村の現象は物質的現象である、文明的生活を享受することのできぬ農村には、今時の分曉漢の居る筈は無い、斯かる農村に居ものは没分曉漢であるのである、此没分曉漢は水を呑んで生きてるものだ、苟も水で生きることに出来ぬ

ものは尻に帆を揚げて都市に趨らんとしてゐる、そして其都市に趁つて何をしてゐるのか、其の爲てゐることは一向分つてゐない、唯丸の内ビルディングあたりで單にギャクしてゐるに過ぎぬ、それは儲かるレプロダクションはしてゐるだらう、併しそのレプロダクション其のものは其衣となり其食となり其住となつて一も残るところはない、無一物に歸するではないか、入ることは入るが遠慮なく出で去る、かの入るをはかりて出るを制するてふことは、丸ビルあたりでは、到底聖人ならでは出来ぬ藝當である、ところが農村にあつてはこの入るをはかりて出るを制することは自然に出来る、これは水呑んでゐるからと思ふなかれ、不自由の自由こそ之を然らしむるものである。

農業の無競争、農村の創意、農村の自由、無競争は農村に在るものをして自然に對しては競争せしむ、農村の創意は人をして自然に對して發案せしむ、農村の自由は四時の不自由なるが如くして實は一定時勞働の如き不自由とは異なる、天真爛漫、掬すべきである、人は物質のみで生きべきものではない、物質のみで生きんと欲す

るものは其好む所に従ふに越したことはない、我が農村は物質では到底生くべきではない、物質の缺くるは農村人の憂となるものではない、憂ふべきは、その勉強せぬにある、乞ふ農村の青年よ農村のイニシエーターを勵め、農村のリバーティを保て。

著者ニ言、此ノ書ヲ農村子弟ニ特大ナタイト
思フナラハ、然々ニハ解ラナイ、ソウタイレテハ
要モナイ、外國語ナンカ、用イナイ、テカ親切
心ト云フモノ、テハナイカ。農業者ヲ看板ニ片
給ラ取ラテ、ル人ニ接スセルナラ、論外カ
(一頁性青年)

四、農村啓蒙運動

農村啓蒙運動

一

農村啓蒙のことを高唱したと思ひます、啓蒙といふと荆棘のはへてるところを開發するといふ意義でありません。教育のないものを教育する、より進んだ教育を興へる、初等よりは中等、中等より高等といふ様に諸種の階級、職業に恰適した教育を施すといふつもりである。一體啓蒙といふ語は古語であります、其語源はどうであらうと、私は今いつた様な意義で茲に述べるのであります、又農村といふ意義は獨り農業者のみをいふのでなく、誰れでも農村に居住するもの、其中には農業に従事するものもあらう、せぬものもあらう、所謂非生産的職業に従事するものもあらう、又何もせず遊食するものもあらう、地主もあり、小作人もある、日雇もある、商人もある、工人もある、教師もある、色々の誰れでも居住するものを一切網羅す

るのであります。そして斯かる色々の農村に居住する人のために、その農村のために啓蒙事業をしたい。それにはどういふ種類の啓蒙運動をしたらばよいか、進んては其の實現方法乃至成績の如何にも及びたい、こう意氣込みて先づはじめます。

二

一體頭髪がもぢやく／＼したのは餘りみよくはない、殊に其人が老人であると、一應は老人だからといふて割引して、却て奥ゆかしいといふ感じも起らないとは限りませんが、去りとて頭髪のキレイになつてゐるは何といふても、見榮がある。其人の心遣が顯はれるものである。青年のものがきたないとなると其れこそ大變、大抵はさらわれる。アレハ物にならぬ。テンデ相手にされぬのが普通であらう、尤も壯士のやうな亂暴を以て賣物看板とする場合は別であつて、そつういふ場合には太いヌツテキを振廻したり蓬髮襤褸の方が人をしていやがらせる効果であらう。それ丈他の方面即ち人らしくするデセンシー(禮儀)の方では缺けるのであつて、社會の表に

立て常識を以て律せらるゝ場合には大損である。既に頭髪の形式だけで苟も常識をばづれる場合には、それ丈の損がある。況して心持にいばらが繁茂して居ては到底駄めである。この心持の荆棘を開發する啓蒙の一層大切なるはいふを待たない、蓬頭亂髪であつて維新當時の浪人氣取り、人をして其の今時を解せぬ無常識の人だと思はしめても、其心根にして高くひらけて居るならば、其眞の風采は堂々たるものがあつて、遂には人をして心服することあらしむるものである。

それほど啓蒙の價値はある、如何にうはべ丈裝飾でも心を欺くことは出來ない。茲に於て心の開發は其人を重からしむることがある。これは一般人としての所論であるが、更に農村の人として農業に従ふものは、又特に其農人としての心掛が肝腎である。それには色々の啓蒙方法がある。一ならべに之をいへば今日の所謂教育がそれでありませす。

三

さて然らば教育のことをいふなら教育といふて今日、はやりの文字を遣ふたらどうだ。何を苦んで殊更異を立つるのであるか、外には意義はない、今日の教育の色々な方法技術中、特に啓蒙に近い教育方法を高調したい、之を世間に殊更に吹聴して世人の耳を聳しめたいからである。若し今時流行の語を以て之を言へば補習教育といふことも、啓蒙教育の中に入りませう。一體補習教育といふと、正式の小學教育を受けないもので、既に職業に従事せる人達に、成るべく正式の教育を受けさせたい。其從來受けない普通教育の缺陷を補ふてやりたい。と同時に職業上必要な科學的智識と理解を授けたい、こゝにいふ理想が補習教育の中に在るものだと思ひます。けれども啓蒙となりますと、それよりは更に此補習教育の方法と精神を徹底せしめたい。補習教育を施すところは、大抵小學校に限ぎつてゐる。或はさういふ一定の移動せぬ機關に依つて行はれてるのであります。

四

然るに啓蒙教育は更に一層補習教育の目的を徹底せんとするものであつて、其教育の教授方法ばかりではなく、更に其機關は固定的でなく、苟も其必要ある限りどこへでも同じものを持つて行つて其教育を授けんとするものであります。固定的の機關になりますと、その機關に固有する、少なくとも一定時はそこに固定する教育者教育技術、方法、標本、圖書、剩さへ機關の位置などがくつついて動かすことが出来ず、之れが教育を受けんとするものは是非とも、そこまで、家庭、學資、境遇が之を許さぬにしても、身體をもつて行かねばならぬのである。そうせねば自己の教育を受けんとする目的を達することが出来ぬ。これはどうしても、何といつても、外に方法がない。

五

それが今日補習教育に力を入れ、文部省あたりでも、益々此教育の効果をあげんとあせつても、到底力及ばぬ所以である。遂にできないことはないとしても、それ

には十分の費用と十分の年月を要しなくてはならぬ。これは否むことが出来ぬ、そして其目的の達せる曉は更に其様の必要が既に起つて来て居つて、到底完全に其眞の目的を達することは覺束ないと謂はねばならぬ。一體我々の考では、日本人は何人でも先きへくと進みたがる。其足元が險呑であつても、一步進んだら、その進んだ人丈、縦し其人數は國民の一小部分に過ぎぬ様な少數であつても其少數の人丈に更に高等な教育を授けんとして無暗にあせる惡癖がある。之は習慣のやうである。それが爲め國民の一部分は非常に高等な教育を受け遙かに其知識藝能が進んでも、大多數のものが、遙かに後位にあるから、何事も捗りが遅い。之は是非大多數の人達を一日も早く進めて遣らなくてはならぬ。これが最も肝腎である。それには現在の補習教育のみでは到底力が足りぬ。是は他に新らしい、新らしくはない新らしい意氣を有する教育を別途に立てねばならぬと思ふのであります。

教育の偏在より教育の普及、一般教育の程度、向上を目指す。

獨逸の如き教育が非常に進んでゐる。單に初等教育ばかりではない、高等教育でも甚しく進んでゐる、其證據には各地に有名な大學が數多くあるのでも分る。それだけ高等教育が進んで居るので、大學教育を受けたものは何處へ行つてもザラに居る。官廳、會社、銀行、其他民間の苟も相當の仕事をして居るところの事務員は、其程度の大小はあれ、皆大學の卒業生であるといふことだ。これが民間の程度の、名は大學といふても本統の大學の組織と權威を具備せぬやうな近いそこの大學とは違つて、眞に權威ある大學卒業生だそうだ。さういふ高等教育を受けたものが、それ／＼各種の農商工業の仕事にたづさわつて居る、ところが數多いところ多種の産業も大多數の高等事務員を收容しきれずして、隨分澤山の無職者がある。縦し就職しても甚だ低い其人柄に不相當の位置に居るものが多い。大學に於てさうだ。助教授にもなれず、ドチエント、我邦でいへば講師乃至助手位でも茶を濁して居る。而かも其人の學識とアルバイト(勞作)は既に儼然たる大家の域を摩してゐる。それ

でもこういう連中はとに角、大學に入つてゐるのだから、どうにか我慢は出来るものの、其外には大學には無論のこと、どこにも就職出来ず下宿の二階にゴロ／＼してゐる連中が中々澤山に在る。此連中は高等教育、大學教育を受けてゐるが飯が碌すつばうに喰べられない。知識丈は進んでゐても温たかい御飯が口にはいらなないといふ憐れは社會状態である。斯る際には動もすれば何か事が在れば世の中の現組織を咀ひたくなる。心からでなくてもツイ何事かあればそれに乗ずる。飯に有附かんとする今頃我邦では政治季節であるが、政治季節には我邦では政治羽織ゴロが澤山出て来る。之は下宿の二階か玄關番として燻ぶつてゐたのだが、此書入時を逸せずに出て来る。そうしてそれ／＼相當に名士學者實業家などの苟も政治に興味を有するか乃至は肩を入れてゐるものの門を叩く。そうして中にはユスリをするのである。大抵の政治家はキズモツ足の心配からその無心に應ずる縦し傷を持たぬとしても、名士の顔から相當の訪門賃をだす、又勢力範圍を維持する必要もありて、政治家などは特

に平常でも多少の喜捨をもするのである、これは我邦の實情である。これは政治界のみではなく實業界でもそうである。そして若し彼等無遠慮に拒絶するならば、或は之れが意趣返しといふて亂暴な、あらぬ噂を立て、其人の私行を摘發して大切なる名譽を傷ける。之れが爲めには怨みを吞んで居るそれ／＼の歴々もある。先づ仕方がない。社會的の出來事としてゐると聞てゐる。

七

これは獨逸の大學教育が萬遍なく行渡つてゐるところより、何事にも表裏損得が伴ふやうに、無職の知識階級が出て來て、社會組織の顛覆、そんな大それたことではないが、兎に角、現在の社會組織の缺陷を明かにし、之を改革乃至改善するの名義を以てそれ／＼改革するに至つた。これは悪いことではない。實際現在の社會組織には缺陷がないとは謂へないからだ。但之を改革し乃至改善する手段方法は餘程之を擇ばねばならぬ、慎重な態度に出てねばならぬ。それを一朝にして天地をひつくりか

へす様な事を仕出かさんとするのは、少なくとも一時社會の秩序を亂すから許すことは出来ぬ次第だ、然るに高等教育を受けた知識階級は動もすれば自然にさういふ風になる傾向がある。それは獨逸のことである。我邦ではそんなことは先づ尠ない。一般に之をいふと、政治方面には既に此無職知識連中の苦々しい非事が行はれてる次第は既に述べた通りだ。然るに我國に於ても既に高等教育といふても大學組織の教育殊に政治法律經濟の方面の教育が萬遍なく行渡るやうになると、勢ひ獨逸のやうに社會的の事件が頻々と起らざるを得ないであらう。

八

そこでかゝる社會的非事の起るを防ぐには、高等よりもズット下級の教育を彌が上にも彌々普及發達せしむるにある。これは實際の効力はやつてみた上でなければ確然と廣言することは、差控へた方がよいであらう。併し縦し其目指す所の目的は十分に達し遂ぐる事が出来ぬとしても、少なくとも職業教育乃至普通教育、延て

は科學知識を普及せしむる利益は決して間違なく得らるのであります。

我邦の人達の最も不得手であるのは、科學知識の幼稚なことである。之れは普通教育小學程度の理化博物の知識ではどうしても不足である。尤も天才的人は既にそれだけでも過ぐるであらう。併し一般人並みのものでは、到底足りないことは言ふを俟たない。論より證據、小學教育を受けた我國民は自家の時計でも直すことは出来ぬではないか。無けなしのお金で時計屋の小僧に捧げるのである。油差しでもそうだ。そうして、單に油差——に莫大——ほんとうの價値のない仕事に壹圓もとられるといふのは、實に馬鹿げ切つてる、莫大な損失である、モウ時計のことだといふと、スグ頭から時計屋の手に渡すべきものだとしてゐる。それほど機械の知識に缺けてゐる。之は平時學校でさういふ方面のことを捨て置くにも關係する。何か理化學の知識があれば、スグ日常のことに其實例を示して應用と利用とを指摘しないせいもあることは之を認める、併し事實は仕方がない。

だから我邦では理科の知識を平易なものでも普及せしむる。其基礎知識でなくとも少なくとも之れが應用並利用を進むべきである、それには國民の大多數の人達に理科的教育を遍ねく授くるやうにせねばならぬ。

右の意義にて補習教育の主要なことを喫緊なことを認めるからして、前段にも文部省の計畫せる補習教育の擴張を望んだ次第だ、併しながら従來行ひ來れる補習的教育は之を小學校乃至類似の固定機關に於て之を行ふのである。而かも固定的に場所に行ふ時期が限られてゐて、更に場所が限ぎられるといふことに更に時が限られるといふことに於て二重の効果が缺くことになつてゐるのであります。

九

これは甚だ遺憾なことである。之は是非改めねばならぬ。併しながらどうしても従來のやり口では遣ふとして遣ることが出來ぬ次第である。従來の其儘の方法では唯考へるばかりでは實行の段になつて徹底的にゆかない。之を徹底的に行ふには、

新たに手段方法を仕換えねばならぬ。仕換えなくともよろしい。新たに始むる、従來行はれてゐる方法でも、新規な意義と重要さを以て眞面目に遣ればよい。別に之れが機關を立つればよい。それに越したことはないのであります。

その然らば、其新規な機關乃至手段方法とは何であらうか、何でも無い、單に固定的な教育と時間的教授を廢するのである。一定の場所で少時の時間に教育するといふ主義を止めるのである。此二者は別々にも行はれるが大抵は一定の場所で一少時間行はれて、或る範圍には被教育者の都合をも顧みぬことはなかつたが、併しそれは或る範圍といふことそれ自身に既に其徹底的に遣れぬことを證明して居ります。従て其全般の効果も大分疑はれてゐる次第であります。

十

そこで之はどうしても一步進んで徹底的に、苟くも場所でも時間でも、被教育者が望むところに、望むときに、其必要とする教育材料、教本乃至標本でも何でも提供

してやるべきであります。是非そうしなくてはなりません。

十一

農村啓蒙運動は教育を農村に徹底せしむるに在ると一言にいへば言ひ得る、教育といふもいろ／＼あるが、尤も農村にふさはしいのは、所謂補習教育である、補習教育を徹底せしむれば、最もよいのであるが、此徹底するといふことが、補習教育の今日の機關では到底できない相談である、それは補習教育が今日小學校で行はるゝに過ぎぬからだ、時間的にも場所的にも動きのとれぬところでやられてゐるか、若し補習教育が今日の儘の情態であつても、移動的な自由な教育運動であるならば、大變効果が擧がるであらう、なぜかといへば、全國農村如何なるところで、苟も郵便のゆくところであれば、移動的教育ならば、持つて行つて教授乃至教育することが出来るからである、ひとり持つて行つて遣るばかりではない、時間も先方の都合でやれる、イヤ先方が己れの都合でやるのである、被教育者が自分の好

きな場所で、自分の都合な時間を利用してやるのである、ひとり時間や場所のみを自分の都合次第でするのはない、其の教育事項でも己れの欲するものをよりどりし得るのである、つまり自分の好む場所で、己れの家でも、學校でも、野良でも、役場でも、カフェーでも、バーでも、如何なところでも、いつでも、學習するのである、さういふ特徴は補習教育にはない、この補習教育の缺くるところを自由的移動啓蒙機關は補ふのであつて、而かもそれを特色とするのである。

十二

何だか所謂農村啓蒙機關の宣傳を餘りやり過ぎ、效能のみを述べ立て、其實體を示さぬやうだが、本論の主とする所は、其理論は既にのべた通りであつて、其後に其目的物を言明する前に、かゝる啓蒙機關の種類を擧げてみたいと思ふ。

アメリカでは移動教育機關として汽車學校がある。これはひとり汽車學校ばかりではない、圖書館でも、共進會でも、博物館でも、移動して各地に開設、得ること

は分かる、そして現にさういふ試みもある、その主催者は國家のみではない、色々の團體乃至個人が之を遣り居る、ドイツでも農會が巡廻展覽會を年々各地に開設してゐる、我邦でもこの展覽會は活動寫真でもつて、大日本農會が一時やつたやうであるが、今でもやつてゐるか、どうか聞かない、がアメリカの如き廣漠たる原野のある農村であつて、各地とも餘ほど隔たつてゐるところでは、さういふ移動的の啓蒙機關が必要であるが、我邦のやうな狭いところでは、そんな必要はない、あればあるに越したことはないが、などいはるゝ方々も無いとは言はれぬ、併しこれは被教育者の居る所の廣いところに亘つてゐるや、否の點にあるのではない、被教育者を教育するのが主である、苟も此被教育者を教育するに好都合な方法があらば、之を實行するをよしとする、よしとするどころではないすぐ實行して其人を立派な人たらしめなくてはならぬ、又金の問題ではない、金の問題で之を止したり起したりする筈のものではない、金はどこにてもある筈のものだ、金がイヤがるとか好む

とかいふことはない、金は人の拵へるものである、我邦では何にかと、すぐ金があるの無いのといふて、囂かましく論じ立てるが、これは誤つてる、これは無ければ拵へべきものである、融通ができるのである、議論にまけると君、金があるか、無ければ駄めだなど、といふことは、よく世間お互に聞くことだ、現に小學校教育費國庫負擔増額問題の如きも、それであつた、これは苟も教育のため必要とあれば直ちにやれない筈はない、物には緩急の別あり、本末もあるが、教育の如きはなかゝ其効果の見えてくるものではない、月日のかゝるものであるから、思い立たら最後、すぐ始むべきである、金の問題は第二次的のものである、そして政治家乃至家の主人は之を作るべきである。

十三

筆が横途に入つたやうだが、とにかく善はいそげだ、善いと決つたが最後始むべしである、金は問題ではない、前に言つたのは被教育の方に教育機關が其設備をひ

つさげてきて、そうして教育するものであるが、今度は被教育者が教育されに、自ら出かけてゆくこともある、それは名をつければ所謂見學はそれであらう、そこに被教育者が出かけて行つて必要な時間そこに淹留して學習乃至見聞するのである、アメリカの農學校などではよくさういふ見學をやる、その場合には全學校が移動することもあるだらう、或は其一部乃至一級のみが移動することもあらう、併し行つたからには其目的を十分達するまでは歸つて來ない、キャンプかなにかを張りて寄宿生活をするのである、例へば牧場見學乃至實習をやるには、さういふことがある筈だ、全級擧つて之をやる、勿論教師はついてゆく、これも移動教育法である、さうして時間も被教育者の都合でやる、勿論農事によつては時季を待たねばならぬ、其時季の範圍内、こつちの都合である、それが先方の都合でやつてくれるのでは折角の結構な教育も役に立たぬ、今の教育の機關は結構には違ひないが、さういふ點に於て、こつちの都合を圖つてくれぬ點に於て、農業者のため全般に恩澤

を與ふることができぬのである、勿論時期學校がある、農閑を利用する冬季學校がそれである、又葡萄の生産地に葡萄學校があり、養蠶地に養蠶學校があるのはそれである、さうしてそれ／＼相當に効果があるは問ふを俟たぬが、それはどうして全般に其教育の惠を浴せしむることは難かしい、難かしいのは自ら進んで農業者が其教育を受けぬこともあらう、併しそれよりも、その移動的ではないことが、主原因である、或は養蠶地方、葡萄生産地方、畜産地方で、苟も教育を受けんとする人は、それはそこで受けられるであらうが、他の地方の人はこれを斯かく容易く受けられるか、どうか、それは疑問であらう、つまり、だれでも、どこでも、いつでも、受けんとすれば、容易く受け得られるやう手輕な教育機關が欲しいのである。

十四

農村啓蒙運動の眼目は移動的教育機關を設くることである、其機關は簡易であり補習であり高等であり専門的であると否は問ふところではない、其機關は展覽會て

あらうが、陳列會であらうが、博覽會であらうが、固定的學校であらうが、講習所であらうが、巡廻學校であらうが、汽車汽船を利用せるスクールエクステンション的のものであらうが、かまはない、圖書館もとよりよい、圖書館にも固定と移動とがある、圖書雜誌講義録のやうな、より移動的教育機關もとよりよろしい、一體農業は生産と販賣をかねてる、此點は工業もそうであらうが、工業では今の處生活必需品をつくることは出來ぬが、農業では衣食住の材料を自ら供給するに事缺かぬことはロビンソン、クルソーが孤島に生活する所以である、それだけ農業は人が人として所有すべき、乃至は具備すべき凡ゆるものを供給するのである、それ故に農業者として立つのには凡ゆる知識凡ゆる技術、凡ゆる趣味を兼ねべきである、其の意義に於て農業といふ學問は社會科學であらうが、自然科學であらうが、ありと凡ゆる凡ての學問知識を總合し乃至は並列してゐるのである、新渡戸博士の「農業本論」の農業といふ解釋が如何に廣汎に涉つてゐるか、それは其筈である、農業は

人生の凡ての方面に交渉なきはないのであるからである、だから農業者といふ業務をとるものは田舎にある凡ての知識、技術、趣味は勿論又都會に在る凡ての知識、技術、趣味をもつべきであらう、之を要約すれば、農村は農村其れ丈で世に立つて行ける、農業者は農業者それのみでくつてゆける、都會人は然らずであるといふことが出来る、農業並に農業はさういふ天下廣汎の學問乃至業務であるのに、世の學者或は農業を自然科學となし、世の識者或は農業を以て一種の營利業となすいづくんど知らん、農業は自然科學ではない、寧ろ一種の社會科學であるべきであらう、農業は世にいふ所の營利業ではなくて寧ろ眞の社會奉仕的業務であるかも知れぬ、筆者は思ふ、此點に於て世の學者、識者乃至政治家などの農業並に農業を誤解せぬであらうかと。

十五

既に農業並に農業にして世の人の解する以外甚だ廣汎のものであつて、天下萬物

を網羅包含する底のものであるならば、農村啓蒙運動に於て其運動の旗幟とすべき所の機關には中々諸種のものがあるべき筈である、茲に其一端は之を論じてゐる、嘗て鼎軒田口卯吉博士は經濟學を甚だ廣く解して生活萬般の學問となした、當時の學者甚だ其廣汎に亘りて他の學問と區別する所なきを嗤笑するものがあつた、併し人生の根本は經濟である、否經濟は凡ゆる生活に交渉せぬはない、唯其交渉する程度に大小厚薄があるのみである、それと同じく今前述の如く農學を廣汎に解釋するならば、或は斯の如きは學問の釋義を無にするものである、強て彼是の差別を蔑するものであるといはるゝであらう、併しながら農學は自然科學では成立たないのである、新渡戸博士の如く雜然として諸種の科學を並べ立て以て農學を組織するとなすは、農學の學たる價值なからしむるものである、寧ろ自然科學の受賣學たるに過ぎぬ、農學たる獨立の立場は毫もないではないか、農學は自然科學の諸知識を以て立ち社會科學之を統一するのである、社會科學とは經濟學乃至社會學をいふ、斯く

農學を解するときには、孰れの學問が、斯かならぬはないと謂ふものがあらう、成程そうであらう、併しそれはその學問に從來の傳統的釋義を以て之に臨むから斯く思ふのである、若し新たな疑を以て其本質に遡りて深く考ふならば翻然悟る所あるであらうと思ふのである。

十六

併し本論でかゝることをあげつらうは、徒らに横道に入り過ぎて、さらぬだに讀者をして本論を分り悪くからしむるに過ぎぬであらうから、やめとするであらう、兎に角農學乃至農業は自然科學と社會科學との諸知識、諸技術、諸趣味を以て之を講究し之を經營すべきであるから、今農村啓蒙機關として其所期の目的を成し遂ぐるには、其運動たる普通いふ所の農業知識以外諸方面に交渉する所自づと最も多くあるべき筈である、筆者の體驗から之を見るときは、農村啓蒙の方針としては、その從來の無意味な生活を有意味ならしめねばならぬ、有意味とは農業者が其内心に

懐く所の心念を存分に暢達せしむることである、農村に於ては主従の觀念は封建思想として抜くべからざるものゝやうではあるが、決して一般には斯く言ふことは出来ぬ、それは或る特殊地方にのみ充てはまることである、そして其或る特殊的地方では既に弦から放たれた矢は向ふ所に飛ばんとしてゐる、否、飛んでゐるのである、其事實は農村に於ける諸種の争議乃至運動に現はれてゐる、此社會現象はどうしても起るべきものであらうか、唯其軌道を逸せぬ様にしたらよい、それには相當な啓蒙指導機關を要するのである、これは道德習慣の涵養によりて馴致することも出来るのであるが、道德慣習は一朝一夕で能くすることは出来ぬ、若かず、早く其目的を達するやうにしたい、それは法律思想を涵養することである、法律思想の涵養は要するに權利義務の眞の觀念を體得せしむることである、我が社會に於て此思想の缺如せるは獨り農村のみではない農商工其他どこの社會でも此思想を殆ど缺如してゐる、それがため諸種の争訟がある、そして悪い辯護士の食ひ物となつて仕舞

ふ現に議會に於ける腕力的演舞の如きは其現はれの一部である、深く權利義務を體得するものは人に迷惑をかけぬが自分も遠慮する所はない暴慢無禮は人のひんしゆくする所であるが、其本質として義務を守る權利思想を體せるものであれば、それは暴慢無禮ではない、然るに議會の亂暴の如きは斯かる種類の權利思想の發露ではなくて、唯野蠻な敵對心の發露である、これは尤も慎しまねばならぬ、それが天下公衆の前に展開されるとは情けないはなしである。

十七

農村啓蒙機關として固定的のものよりも移動的のものがより適當してゐる、固定的のものはいふまでもなく學校、圖書館、試験場などおもなものである、移動的のもののは先づ雑誌を第一に推さなければならぬ、講義録の如きは之に次ぐ、但講義録類は雑誌のやうに年中毎月一回乃至數回發行することは出来ない、のみならず其内容もスラ／＼變へるわけにはゆかない、學校のエキステンション即ち學校の教師職員

が各地に出張して講演乃至は教授をする、云はゞ學校の出店のやうなものは、内容は常に變へることは出来るだらう、が併し同時に各地に開くことは先づ不可能である、其規模の程度と資金の如何によつては、國中どこにも同時に一樣に施設することも出来ないといふこともなからう、併しながら、そう手軽にはゆかない、先づ出來ないとみる方が穩當である、そこへゆくと雑誌は手輕に需用者のあるところに、どこへでも、都市に近いところでも、山奥でも、苟も郵便物の届くところには、どこへでも普及するのである、雑誌の啓蒙機關としての重要さはそこにある、更に雑誌は毎月一回乃至數回發行するのであるから、日進月歩、如何なことでも苟も農村の啓蒙となる事柄は、大小となく輕重となく難易となく、之を掲載することが出来る、其變轉輕妙活動的であること、これ亦雑誌の啓蒙機關として他の犯すべからざる大使命である。

十八

雑誌—啓蒙機關として苟も郵便物の届くところなら、どこへもゆくのである、それから其内容は何でも彼でも啓蒙の價值ある事項は直ちに之を掲載することが出来る、そうして更に月々之を改むることができる編輯の態様はさまざまあるが、最も之をセンセーショナルなものにすれば、其啓蒙の效果も大となるであらう、茲に於て雑誌が啓蒙機關としての第一人者であることは之を否むことは出来ない、我邦の農業雑誌は其數も少ないが其量も甚だ尠ない、アメリカの農業雑誌乃至農村雑誌の種類も多ければ其發行部數の何十萬を以て數ふるに比して殆どいふに足らぬ、多いところで發行數やつと四五萬に過ぎぬ、尠なきは數千に足らず多くは萬以下である、といふは如何にも我農業者乃至農村に雑誌愛讀者の尠なきにアキレルのである、殆ど愛讀者は無いといふ有様である、全國町村の數一萬二三千、そうして農業雑誌愛讀者一萬以下といへば一町村に一人か乃至一人以下である、さりとて我が農業者の知識慾の無いのはどうしたものか、これはどこに其罪があるか、農業者側に

あるか、ソレとも雑誌側にあるか、これは大に講究すべき問題である、此問題は啓蒙機關としての農業雑誌の使命の重く且つ大なるにつれて最も講究すべき價值がある。

十九

此點に就ては筆者の考ふる所では、罪は雙方にある、農村に於て相應の土地を有し農業經營をなすものは、斯道の雑誌を繙く筈のものである、それが他の娛樂雑誌を買ふが専門の農業雑誌は之を手にしぬやうである、まして小作地貸付地主が毫も農業雑誌をふりむかぬのは當然過ぐる次第ではあるまいか、その斯かく我邦の農業者が農業雑誌を顧みぬのは、我が農業の先きの見へてる證據の一であらう、從來の農業組織乃至經營法では到底今日の青年の心を惹留むることは出来まい、然るに茲に筆者の驚いた事實がある、それは東京の或る農業専門學校の生徒が尋ねた、日本の農業に機械を用ゐる餘地があるてせうか、或る某々の二博士は餘地がないと講義

せられた、そうして其意義は今日の我が農業では機械を用ふるは徒らに經濟上損がゆく、それ丈我が農業は勞力集約であるか、その勞力集約の組織であるのは最も經濟的であるのだ、それに機械化せんとするのは不經濟であるといふのである、既に學者ですら機械例へば發動機を我が耕種組織に入れるのは考へ物だといふ、そうして青年學生ですら之を信ぜんとするのだ、それ丈我が農業の特長は痼疾となつて我が農村人に累を及ぼしてゐる、此の膏盲に入つてゐる疾病はどうしても打ち壊はさねばならぬ、イヤ何もさうリキムにも當らぬ、學校では先生が反對の講義をしてゐる、實際は發動機はドシ／＼行はれてゐる、論より證據、事實は或る學者が希望せぬところの農業組織上の改造が根本的に行はれんとしてゐるのである、これは、農業はツマラぬ物である、此ういふ觀念が農業の機械化によつて將に破れんとしてゐるのを示すものだ、農業が工業的になるのだ、インダストリアル・アグリカルチュアはツマリ歐米のそれだ、特にベルギーのそれだ、さうなれば農業は在來のそれの如く

ツマラヌものではなくなる、青年の腕節乃至技倆を振ふべき恰好の價值のある文化的舞臺である、ソコニ農業乃至農村の活氣が生れて、コウなれば占めたものだ、雑誌も普ねく行はれるだらう、行はるれば行はれるほど農村の活氣も振興する、これは、ヅバイス、ヅハーサである、サウいふ氣運をいつ早く盛 蘊醸せしめねばならぬ、それには又一方農村の移住をモット盛んに自由にすべきである、或る學者は農村の移住を嫌ふやうであるが、これは人よりも物を重しとする舊弊の思想である、最も排斥せねばならぬ、斯かる學者が大學にゐるのだ、農村の振はぬも當然である、併し貴族院にて普選に絶對反對のゴ講義を長がくくとやつた老教授があつた、此人は議會と大學とハキ違ひたのだらう、論ずるに足らぬが前きの農業の機械化乃至農業者の移住を好まぬ論者と、その時勢を辨へぬ好一對といふべしである、

二十

啓蒙機關としての農業雑誌が普ねく行はれぬ罪の一は農業者側にある、その農業

者の罪は從來の我が農業組織の時世に伴はぬためである、之は宜しく改造すべきである、之を改造して、我か農業を工業化すれば、農村に活氣がつく、活氣がつけば農業も動く、雑誌が行はれぬ筈は無い、正にアメリカの農業の如くなるであらう、果して然らば農業雑誌の内容の改造が先づ來らねばならぬ、農村に農業雑誌の普ねく行はれぬは、その咎、一は農業者側に在り、一は雑誌側に在るのである、然らば如何に雑誌の態様内容を改造すべきか、此點に就ては筆者は從來の農學の釋義の偏狭を前きに指摘した、そこに農業雑誌に掲載すべき幾多のものを逸してゐた、價値ある重要事項をみるのである、既に豁眼の讀者は茲に之を筆にするを待たぬであらう、が暫らく眼をねぶつて述べれば、農業は自然科学でなく寧ろ社會科學であるとするも、農學を組織する材料は自然科学のものであるから、此自然科学的組織物を逸することは出來ぬ、それは當然である、だから從來の技術一點張り以外に色々雑多の社會事象乃至經濟事象の面白い、趣味あり、而かも實益ある事柄を載すべきであ

らう、また必らずしも實益にのみ拘泥すべからず、あまりに深くは入ると天氣を洩らす恐れがある、これは洩らしても差支ないわけであるが、先づ大抵は右で分るであらう。

二十一

斯の如く農村啓蒙機關として第一人者である農業雜誌の使命は分かつた、使命が分れば、如何にしてその使命を辱かしめざるべきか、これ我々同人の常に心に銘すべきところである、我が日本農業雜誌は讀者と共に心して斯道を進んでゆくてあらう、而してやがては我が農業雜誌の使命が酬えらるゝ日が来るであらう、但何事も之を自然に任して其運行に關せぬのと、之に人爲を加へるとによつて、其使命の執行上成績に大差あるばかりではない、甚だ遅速も生ずるのである、ソコで農業雜誌の農村啓蒙機關としての大使命を果すには相當の運動を要するのである、運動は人々相誘ひ合ふてするのであつて、大に興味も如はり、従て所謂働らき甲斐のあるも

のである、これは是非ソウすべきことを望まねばならぬ、が去りとして必らずしも人を頼まなくてもよいのである、此使命の大なることを深く知れるものは、請ふ先づ槐より始めよ、他にたよるには及ばぬ、そうして多くが自ら恃みて此運動に従事するときは則ち此啓蒙機關が全國全農人に行きわたるときである、筆者は苟くも農村啓蒙機關の大使命を仕遂ぐることに農村乃至農人の厚生を來す基であると思はるゝ方々の自ら進んで此れが運動に従はれんことを望んで止まぬ、そうして斯る熱誠人士が各地に盛に奮起されるれば、こゝに自ら期せずして農村啓蒙運動は成就するのである。

五、國家並に自治體農業論

國家並に自治體農業論

一

人生の根本的必須品は三つある。衣食住是であつて、殆んど全く農地より供給せらるゝものである。此點より觀る時は社會問題の鍵鑰は農業的のものならざる可らざるを發明する。蓋し衣食住の劣悪なる状態より生ずる人々の困惑の數量は、國家及自治體をして土地より直接に、大規模に於て人々の爲めに衣食住資料を供給する事務に任ずるを、不可抗力的のものとなすからである。是れ英國に在りて集産主義農業新に唱へられ、國家並自治團體農業を實行すれば、社會問題容易に解決せらるべしとなすものある所以である。尤も集産主義（國家社會主義）的農業は決して新規の試みではない、又決して未知のものでもなく、既に英國の公共社會に於て、諸方面を通じて採用せられたるものたるに過ぎない。即ち原野森林實行委員、寺院實行

委員、陸軍省及海軍省慈善實行委員、諸種農業專門學校及酪農研究所、監獄署、市役所、地方並市街貧民院、國立公立病院、首府養育院及び其他の如き、皆若干の農地を所有し、之を自ら經營せざるなく、其或ものは之を貸地とし、或ものは營利的に經營し、其或ものは之を自家用的に耕作し、或ものは自家用及營利用に之を利用した。而して之を全體より見る時は是等の國家並公共團體の所有農地面積は尠なからざる歳入の源泉となつて居るのである。而して現に行はるゝよりも更に有効に此を處理するときは、公共的貢獻を一層容易に著大ならしめ得べきである。されば集産主義的農業を以て社會問題解決の鍵鑰となし、此を主張するものゝ論據は從來諸公共團體の農地所有及び經營の實際の效用に就て、研究調査せるに起因せるものであると謂ふべきである。蓋し英國は商工業の發達により少くとも一世紀の大部分の間世界の商店及び工場となり、而して多々益々食料及原料に向ては他國に依頼するに至りたれども、農業は英國の産業中最大重要な位置を占むるものであつて、斯

業は一般に國民生活の基礎及び源泉であるばかりではない、農業なくしては總て他の産業の成立不可能になるものであるが、其地方民減退、製造工業の優越、及農耕地面積の漸減の事實あるにも拘らず、農業は尙英國にてすら他の産業よりも多數の人々を使用するのである。然れども農業ほど労働者の掠奪完全で、人生享樂の標準低く、生活の一般状態の可憫なる産業はない。その然る所以は容易に之を説明することが出来る。蓋し農村は散在し、孤立の状態に在るが故に、都市の労働者が大工場に密集して團結し得るが如き事の甚だ難きを常とするに起因し、更に工場労働者に其組織を容易ならしめたる機械の發達が農業労働者には却つて益々其數を減ぜしめ、其孤立を廣めしむることになつたからである。斯る事情竝に農業労働者の例外の貧乏の結果として、英國に於て農業労働者の労働團結を組織するの企ては全く失敗に歸した。失敗に歸せずとも永續せず、而して僅かに一度の成功を齎したばかりであつた。是の故に英國に於て農業の改造及農業労働者の産業的組織の方法による

土地問題の解決は明かに不可能なりと謂はねばならぬ、彼等は餘りに弱過ぎ散在し過ぎ、貧乏過ぎるが故に、農民救済の目的は唯國民關係として、農業の國家組織のみに依て解決さるべきものとしてある。從來農業が採用せる小なる地主、農夫並農業労働者の三位一體及單に是等三者の利益のみを本位とするものは社會全體の爲め及び唯社會の爲にのみの國民の立場よりするものとされた。

以上は英國に於ける國家並自治團體農業を主張する集産主義農業者の所説概要である。然れども一方國家社會主義に對しては、ギルド社會主義が同國に於て儼然存在して勢力を有することは、茲にいふを須たないであらう、蓋し英國の國民性よりすれば、後者の方一層其根底の深きものあるを信ぜざる能はずと雖も、近來英國流の個人主義に對して、獨逸流の國家社會主義の思潮の横溢するほどにあらざるも、相應に奔流しつつあるは、吾人の首肯せざるべからざる所である。そは兎に角國家並自治體農業を主張する者は、大消費をなす役所に就て、其公有地が如何に其

消費を濟充すべく使用せられ得しかを高唱する。例へば陸海軍に就て見るに陸軍にありては、國費を以て供給する何十萬何百萬の人々に衣食住の材料及び之に加ふるに馬匹の大數其飼糧の莫大の數量を以てして、兵營所在地に有する土地に依て之を供給し得られざる筈なく、陸軍は其所有地を貸地となし、而も御用商人より食料を購入せねばならぬ理由がある筈はない。此點は森林原野局貧民院及市役所、郵便局、鐵道院、國立公立病院、養育院、保健院其他療養院等に在りても同じである。要するに苟も國家並自治團體の所有地は之を農用に供し、農業労働者を茲に使用し、一方其消費の原料を自給する策に出づるは、英國に在りては到底此方法によるよりは、農民救済乃至社會問題解決の道なしとする。惟ふに土地所有權分配の偏頗なる英國の如きにありては、農夫の所有地存せず、僅かに小農地法ありて之を糊壁するに過ぎざるが如き状態であるから、斯る國家並自治體農業の方法によるを理あり且有效となすを得る。然れども佛國其他同様の小農國に在りては、土地所有權の分配

比較的良好にして、小農制なるを以て、英國に行ひて適切有效なるが如き運動も之を實行すること不可能である。此點彼等集産主義者も亦自ら首肯するのである。既に佛國其他小農制の國に在りては、國家並自治體農業説を不可行とすれば、我國に於ても亦同様なるべきを思はなければならない。然れども予輩は、之を農業改造及農業労働者の産業組織による土地問題の解決に進むこととてふ觀點よりせず、單に不用地の農業利用てふ點より我が陸海軍を始め、諸官公廳所有の不用地面積が相應に衣食住解決に資する所あることを信じ、敢て其農業的利用を提唱するものである。

二

國家並自治體農業論の如き新規なる提唱を避くるも早急に衣食住原料の生産に就て、最も効用者大なる捷徑がある、産業組合を通じて農業生産の源泉たる普通肥料の供給を普及することである。開墾助成法による農業利用地面の擴張は固より衣食

住問題解決上較著なる寄與をなすものであるが、今から土地を開發し之を熟土となすは固より容易ではない、且つ莫大なる資金を用意せねばならぬ、加之、未開墾原野は概ね不毛地なりと見做さねばならぬから、彼是相待つて社會の物質的基礎及び總て吾人の物質的供給の源泉としての土地問題解決上、早急なる寄與をなさんとは固より望むことの出来ぬは明かである。是れ予輩が産業組合の手を経て、農業者に普通肥料を供給するのが、最も捷徑だとする所以である。今や産業組合總數は一萬三千に上り、組合員數は百九十六萬六千人を數ふ。而して資金總額は二億二千三百三十六萬圓餘である（大正八年十二月末）之を英國の消費組合數一千三百八十五、組合員數三百五萬四千人、人口千人に對する組合員の割合二百六十三、獨國の消費組合數一千三百七十五、組合員數二百萬人、人口千人に對する組合員の割合百二十一、佛國の消費組合數三千三百六十一、組合員數八十八萬一千人、人口千人に對する組合員數二十七萬六千人、人口千人に對する組合員の割合二百九十、丁抹の

消費組合數一千七百五十、組合員數二十五萬人、人口千に對する組合員の割合三百五十（千九百十四、佛國ヂート氏の統計に據る）に對比するときは大に遜色あるは固よりである。彼是の比較は我邦のは産業組合總數なるに、歐洲諸國のは單なる消費組合の數であるからである。更に之を我邦の消費組合（購買組合）は約八千に過ぎざる事實と對照する時は、如何に我邦に於ける購買組合の貧弱見るに足らざるを知らるのである。而して更に約八千の購買組合中我農家に最も親み多く、而も廉く效能の安全にして一般的なる豆粕肥料を取扱ふもの、僅かに三千に足らずといふに至つては、本邦の産業組合運動從て中産社會政策に意を留むるもの、甚だ尠なく、中産社會自ら亦自家の社會的位置を自覺せるもの甚だ尠さを知らしむるのである、是に依て見ても、將來我邦に於ける衣食住問題の解決甚だ容易ならざるを悟らしむる。そは扱て置き、吾人の所謂産業組合の手を経て、農業生産の源泉たる普通肥料を供給することを我邦に於ける衣食住原料の生産に就て、最も效用著大なる捷徑となす

の意義如何。

三

我が普通肥料は大豆粕を以て首とする、然るに此肥料が偶々其最高價より下落するにも拘らず、屢次農家の需用季に手に入らざりしことは、苟くも農村の事に注意を拂ふもの、甚き遺憾とする所である。大豆粕の如き農家殆ど多少之を施用せざる事なき一般肥料が此の如き需給の均衡を得ざる事は、衣食住原料の生産上最も大なる障害たるはいふ迄もない。此意味に於て豆粕肥料を最も廉く、何時にても而も迅速に確實に豊富に農家に供給することは我邦に於ては最も卑近であつて、而かも實效多大なる農政たることが分かる。此實效著大なる農政策を實現するには産業組合を藉りて成立する一種の公益機關を要する。蓋し産業組合殊に購買組合は、農家の生産材料を供給する重要な機關である。然るに此産業組合が農家の最も切要する大豆粕を其需用季に必ず供給する能はざる状態にあることは、前述の事實之を證す

る。而して此事實によりて吾人は大豆粕の供給を引受け、而も普通營利事業の如く之が需給の均衡に無關心でなく、只管營利のみを目的とせず、其營利を相當の程度に抑制し主として農家に豆粕肥料の供給を適宜確保する事のみ目的とする公益的性質を有する一種の營利機關の必要を認める。而かも實際の必要は此の如き營利的公益機關の創設を促進し居るのである。而して今や中央卸賣組合の設立せらるゝ運びに至りたるは吾人の斯業及斯民のため大に喜ぶ所である。

六、産業組合振興機關設置の必要

産業組合振興機關設置の必要

一

産業組合は小産業者が其の團結によりて大資本に對抗し以て、彼等の經濟及び産業の維持發達を圖る組織であつて、其の因や遠く十八世紀に起り、固より消極的のものではあるが、世界大戰の結果、今や産業組合殊に消費組合の發達は、其の消極的範圍を超へて積極的の域に進み、更に大戰の背景の下に社會改造の根本的思想をも胚胎し、進みて或る程度に於て之れを實現するに至つた、此の消費組合に關する社會思想に就ては、茲に之を論ぜぬが、要するに從來生産者の立場のみよりせる資本主義的産業組合が、分派して社會主義的乃至協同主義的のものを生ずるに至れるは、佛國のザート氏の曰ふ通りである、社會主義的組合は之れを措き、協同主義的組合は所謂ギルド主義であつて、社會主義的組合の如く單に消費者の立場のみに立